



案山子
2021 冬



新潟大学文芸部



目次

目次	1
お題	1
Parabellum	2
火葬	7
通常作品	17
Pram	18
疫病の詩三篇	29
痛みを覚える	32
ブラック・クロック・ダウン	37
ひいちゃんとはな	52
トラベリング・サークル	55
舞台（リフリーズ）	73
奥付	81

目次

目次

◆お題作品『炎』

・ Parabellum

やわらか乳業

・ 火葬

佐藤

◆通常作品

・ Pram

やわらか乳業

・ 疫病の詩三篇

雪兎

・ 痛みを覚える

笠原ざわ

・ ブラック・クロック・ダウン

香月日向

・ ひいちゃんとはな

佐久間佳雪

・ トラベリング・サークル

大島治輔

・ 舞台（リフリーズ）

小原優一郎

お題

第三十三回お題作品集

お題「炎」

Parabellum

Parabellum

やわらか乳業

そのころ、私はとある食品会社の外回りとして働いていた。取引先に約束の電話をかけ、約束した時間ちょうどに到着し、予定された業務と軽い世間話を済ませると会社に戻る。時々カフェに入り、好きでもない苦いコーヒーを飲みながら約束と約束の間の時間をつぶした。

八月十一日は私の出勤日だった。社用車であるフォードのマスタングでグランド・セントラルターミナルを西に抜け、五番通りのホテルの並びの中心、ホテル・パラバラムに入り、見るからに上等なスーツを着た男たちをなるべく避けるようにしてエレベーターに滑り込んだ。

紺色のスーツを着込んだエレベーターガールは私の格好——穴をアイスピックで増やしたベルト、いかにもおばあちゃん趣味のスリーピース・スーツと松ヤニ色のネクタイをチラリと見て、素早く私がブロードウェイの人間でないことを理解したようだ。エレベーターのフロアの、長い毛の絨毯には大ぶりのспанコール、プラスチック・ビーズ、化粧品らしい匂いが染みついている。エレベーターガールは笑顔で私に尋ねた。

「何階ですか？」

「八階に」

エレベーターガールはバーを動かす。蛇腹が開き、ドアが閉じる。

八階に着くと、私と入れ違いになるように両手いっぱいドレスを抱えた衣装係、細かな化粧品でいっぱいのカートを持った化粧係が入れ違いで乗り込んでいき、ルーム・サービスの皿を乗せたカートを押すボーイひとりが八階のフロアに取り残されていた。階数を示す電球は一階めがけて小さくなっていき、汚れたフォークと空っぽの皿が、カートの上にある。

私は八階のフロアを左へ曲がって、たくさんの女たちとすれ違った。一生ぶんの帽子と靴とイヤリング、数名の重役らしい、腹を膨らませた男たちが流れてくる。廊下の奥から冷たい空気が流れ出て、冷蔵庫に似ていた。突き当たりはエラ・ディンサーの部屋だ。

ドアを開く。プライベート・スイートの装飾は薄いベージュの壁紙、オークの木の飾り彫りで統一してあって、彼女の置いたらしいシルクのような、しかし光沢を殺した白い布が上等な椅子のほとんどを覆い隠している。

今日のエラは既にナイトガウンを羽織り、鏡台の前にかけていた。二本の指で肌にコールドクリームを塗りつけてドーランを落としている。鏡をとりかこむ豆電球のない今、彼女の顔は左側にある小さなランプで照らされて、顎の輪郭が金色に光って見えたが、クリームが塗りつけられて下品な光り方になった。

「早くして」

彼女はそう言って、クリームの入ったプラスチックケースを閉じ、鏡越しに私を見た。おびただしい数の化粧品のボトルの中に、シャンパングラスが見えた。私の革靴にぶつかったボトルはスパークリング・ロゼだ。私は化粧品の匂いの中に、揮発したアルコールの匂いを感じた。

彼女は私が彼女の方を見ているのに気づき、眉をひそめた。

「私、今日は眠たいの」

「ええ、すみません」

彼女は目を伏せ、化粧品の中からリップバームを探し出す。小指でたっぷりすくって、唇の一番厚い真ん中に乗せる。私は鞆を部屋の床に開き、ビロードの袋から真鍮のろうと、小ビン、ゴムチューブを取り出した。次に蒸留水の大ビンを取り出し、すべてを綺麗にすすぐ。

私は鏡台の側まで歩いて行き、彼女に合わせてかがんだ。彼女の肌には、いつもファンデーションで隠れている小さいそばかすがあり、彼女が身じろいで重たいブロンドをのける度によく見える。頬のあたり、^{まなじり} 眦の線を伸ばした先にろうとの曲線を当てた。まもなく、彼女の瞳から一条の涙が流れ出た。

ろうとに涙が溜まり、落ちてくるまでには時間がかかる。涙の粒は小さい。彼女は化粧ポーチからジャック・ダニエルを取り出し、グラスに薄く注ぐと飲み干した。白目が充血し、押し出されるように涙がこぼれた。私はそれを掬う。

「早くして」

私は目をそらす。私から彼女にしてやれることは何もなかった。彼女のナイトガウンの合わせから、黒いコルセットと、ブラジャーのパッドの部分が見えた。

○

私の妹は学校を卒業してから数年の間、ラジウム染料を時計の文字盤に塗る仕事をしていた。ラジウムは夜もほのかに光るから、アメリカ中の人々がラジウムを塗った時計を欲しがったのだ。

そのころ、まだ小学生だった妹はペンキで犬小屋の屋根を赤く塗った。それが大変上手く出来たから、父も母もそれをいたく褒めた。

六年後、学校を可もなく不可もない成績で卒業した妹は、新聞に載っていた求人広告に応募し、時計工場の労働者に採用された。両親は親元を離れることに反対したが、しかし彼女は早く田舎を抜け出したい思いひとつでそれを押し切った。私もそのころ、一

二〇キロほど離れたところの大学を卒業し、まもなく私の働く食品会社に勤務するため、ニューヨークまで引っ越すことになっていた。つまり、実家との距離はあっというまに遠くなる。母は子供ふたりを同時に失うなんて、といたく悲しんでいた。

家を出る前日、私と妹はふたりで家の裏手にある小さな丘まで出て行って、少しの間思い出話をすることにした。

丘の一番高いところにはヤナギの木が一本生えていて、私や妹はこの木にブランコをつけてくれと言って父を大変困らせたことがあった。私と妹がブランコから興味を失ってから、ヤナギの木はますます背丈を伸ばしていた。妹は木のうろに背筋を添わせるように腰かけ、私はその隣に座った。

妹はリードを外し、犬を庭に放した。湿った風が北から吹いてくる、涼しい庭だ。北にはちょっとした湖があり、そこの冷たい空気をたっぷり含んだ風がこのあたりの草木をみんな濡らしていく。犬はテーブルクロスにコーヒーを零したような、白と茶色の毛並みをし、ちょっとした子供ほどの大きさをしていて、ひどく嬉しそうに走った。

子犬のころからそうだった。テディベアくらいの大きさのころから、毎日えらい量の食べ物を食べ、人間がまだ食事しているとみるやすぐにテーブルの下までやってきて、分け前を貰うまでうろうろ回り続ける。肝の据わった犬だった。父はほどなくして板材を買いそろえ、庭に上等な犬小屋を作った。まだ子犬だったその犬が十匹は一度に眠れるだろうという大きさだった。しかし結局、犬が小屋の入り口より大きくなってしまったので小屋を作り直すことになった。子犬と三年ほどを過ごした妹はそのころ十歳そこいらで、小学校に通っていた。美術の授業の通りペンキを塗り、犬の名前を書いた。

犬は穏やかな起伏のある庭をひとしきり走ると、突然怖くなったように妹の元へ帰ってきた。賢く、ときおりひどく臆病な犬だった。

妹は犬の顔をじっと見つめながら、しかし私に向かって話しかけた。私も犬の、デッキブラシのように長くだぶついた毛並を見た。

「ねえ兄さん、私には化粧品を送ってよ。ニューヨークなら山ほど売ってるでしょ。ねえ、一月にひとつでいい」

「化粧品なんてわからない」

「店員に訊けばいい」

妹は犬の毛に頬を寄せ、しばし犬の呼吸の音を聞いた。そのころ犬はもう高齢で、いつでも口の端からよだれを垂らしていたが、妹はそんなのに構わないように犬を抱きしめた。

「靴でも、洋服でもいい」

「でも、どうして」

「きっと一日中ブラシを持ってたら、手紙を書くのがいやになる。それに、私たちあんまりにも話すのが下手でしょ、だから電話じゃあ駄目だし……」

私は、妹が永遠の別れのようにこの出発を考えていることを奇妙に思った。私はまだ、帰ろうと思えばすぐに、何の理由もなく家に帰れるように思っていたのだ。

その後、私と妹が再会したのは、私と妹が家を出てから四ヶ月ほどした、クリスマス休暇の日だった。犬はクリスマスを待たずに死に、遺骸はもう既に庭へと埋められていた。私は家に帰ってすぐ、荷物を置いて裏庭へ出た。ヤナギの木の下に、目印に大好きだった缶詰がひとつ置いてあり、まだ湿った土が乱暴に根のまわりに落ち、厚く雪を被っていた。母に手紙で知らされた通りだった。

私は犬のことを思い出していた。私はもう犬と遊ぶほど小さな子供ではなかったから、犬はほとんどの時間、幼い妹と遊んでいた。ただ犬が死んだという事実が本物であるか、まだ判断しかねていた。犬との朧な思い出そのものが幻であったように思えたのだ。

雪を踏む音で振り返ると、そこには妹が立っていた。四ヶ月ぶりに会った妹はいたく痩せていた。腕や足がほっそりして、キャメル色のコートの腕のところはだぶついていた。ただ、私が買って送った口紅——今思えば、それは酷く悪趣味な、鮮やかな赤だった——だけが血色の悪い顔から浮き上がるように見えた。

妹は黙っていた。キッチンに隠れて酒を飲んだのだろう、既に酷く酒臭かった。充血した目の周りの化粧は既に溶けてしまっていた。

今思えば、彼女は熱心に覚えた聖句も、賛美歌も、すべてラジウム入りの塗料が原因で忘れてしまっていたのだろうが、私はそれを知るよしもなかった。私は彼女を軽蔑し、すすり泣く彼女をその場に置き去りにするように家へと入った。家の中はオレンジ色の暖かい光で包まれていた。クリスマスの準備で、遠目に見える家屋すべてが同じオレンジ色をしていたのだ。妹が体調を崩したのはそれから一年後のことだった。

私の妹は、ほどなくして時計会社を退職し、近所に新設された食品用涙の製造ラインで働くことになった。彼女の体内に溶け込んだラジウム塗料は化粧品で隠れないほどの酷い皮膚炎を起こし、今となってはどの程度であったが知るよしはないが、記憶障害を起こしていた。彼女はベッドに入ったまま、両目をビニール製のマスクで覆い、絶えず刺激性の気体——タマネギの臭いに目をさらして、涙を流していた。タマネギの臭いが染みついたその涙は一般家庭の調理用、スパイスの一種として販売される。そのグレードは一番低く、涙のうちでも特別安価で販売された。

妹は爛れた皮膚に涙が染みるのが痛いと言って泣き、誰より多く涙を流した。歩合制の給料はしっかり支払われたが、彼女は化粧品や洋服や靴をほとんどすべて捨て、毎日ほとんどの時間をベッドの上で過ごすようになった。彼女がはじめて咯血を起こし、私が見舞いに行った日、彼女は三時間のあいだずっと眠っていて、私は何も話すことができなかった。

私は、もう化粧品を必要としない彼女に手紙を書くきっかけを失った。今思えば、私は本当は犬を贈るべきだったのかもしれない。小さくて利口な子犬。そうすればもう一度、素晴らしい兄妹をやりなおせるだろう。

○

私はしばらく、ほとんど子犬を飼うためだけに働いた。

妹の入院が知らされてから、妹への贈り物にあてていた分の金は別に貯金していた。チョコレートの入っていた小さな缶に札を貯め、いつしか店で一番高い子犬だって買えるくらいの額になっていた。私はどんな子犬にしようか、よく店を回った。血統書付きの犬は大抵、綺麗な一色の毛並みをしていて、あの犬のようなぶちがらの犬はほとんどいない。もし似たような格好の犬がいたとしても、あの犬のように長い毛で、チョコレートとバニラの二色で、デッキブラシのように柔らかく、長い毛のものはなかった。

私はエラ・ディンサーの涙を集める。彼女の涙は名前が入ったロゴシールを貼られ、食用涙協会の認定を表すスタンプを押され、口を蠟で固められる。決まったルートを辿ってレストランやホテルに運ばれ、ありとあらゆる高級料理やカクテルに使われる。完成した料理に一滴。そのために、すべてのレシピから涙一滴ぶんの塩と水を差し引く。

映画女優の涙は私の給料とくらべるのもばかばかしいほどの高値で売れる。エラ・ディンサーの涙は真鍮製のろうとで集める。最高級の食用涙——女優の作る『天然物』はろうとひとつで簡単に味が落ちてしまう。もちろん、妹のようにビニール製のマスクを着けること、目を刺激性の物質に暴露することも、食用涙協会の規定で許されていない。彼女の片方の涙腺は手術で塞いである。そのほうがたくさん涙を流せるから。

エラは酒を煽り、ひび割れた唇は酒で濡れた。そして無感情に涙を流した。左目から流れる涙がビンの中で揺れる感触が指先で感じられる。私はなみだがビンの目盛りを越えるのを確認し、ろうとを取り外した。

エラは私と出会った当初、しきりに自殺の方法をつぶやきながら涙を流していた。睡眠薬、首吊り、出血多量。しかしいつしか、そういう事を言わなくなった。彼女は二十一歳になった。酒を飲めるようになったのだ。彼女はもう台詞以外の言葉、私の名前さえ覚えていられないようだった。美しい彼女はふらりと立ち上がり、バスルームへと幽鬼のように歩いて行った。

私は鞆に荷物を詰めた。日付の書かれた茶封筒にビンを入れ、封をする。ろうとを蒸留水ですすぐ。妹の肌に触れるときのように指に触れた。希釈された涙を私は口に含んだが、味はなかった。

了

火葬

火葬

佐藤

父親の葬儀があった。だが、帰郷しなかった。

夜になっても雪が降り続いていた。

道の脇に除雪されたのが胸の高さくらいに積まれているのは、雪の降らない地方の出身であっても、十回以上も繰り返せばもう見慣れた冬の光景だった。

家を出て、住宅街から田園地帯の方へ通りを下っていた。

こんな日にふらふらと外をほっつき歩いているのに大した理由はない。自分でもわからない。虎になった訳でもないのに、ただ居ても立ってもいられなくなって、家を飛び出した。部屋着にコートを引っ掛けただけという無謀な薄着だったが、不思議と後悔はなかった。

夜暗は飲み込まれるような真っ黒で、街灯に浮かび上がる雪が狂気じみた真っ白だ。

今ならいい小説を書けるかもしれないと思った。

小さい頃から小説家になりたかった。

腐るほど小説を読んだ。小説の書き方の勉強もした。

だが、才能はなかったらしい。

普段は会社勤めだが、暇を見つけてはそれなりの駄作を書き上げて、募集に送り付けては落選ということを十年以上も繰り返していた。

少年時代を題材にして書くことが多かった。

最後に書いたのも、小学生くらいの男の子の話だ。

悪戯をしては叱られて、その日々の中の小さな発見と成長を見出す——そんな話だった。

父は眠るように死んだらしい。

昼間に兄貴から電話があって聞いた。

父は昭和の厳父といった感じの人だった。この国が終戦から立ち直り始めた頃に生まれ、学業もそこそこに地元の工場に勤め始めた。三十路を過ぎた頃に独立し、その後は地方のそれなりに有名な会社を作り上げた。

兄が生まれたのは父が四十歳の時、次男の自分は五十歳を過ぎてからだった。

ドキュメンタリーの題材になりそうな人生を全うした立派な人だと——まるで他人事のように思う。

だが嵐のような男も、最期を迎えれば当然のように凧だ。

実感はない。何せもう十年以上会っていなかった。

とはいえ、葬儀にも顔を出さないのは流石に親不孝が過ぎるとは分かっている。

それでも骸を、骨を、見たいとは思わなかった。昔から火葬が嫌いだった。

三十年近くも生きていれば、当然近しい人の葬式も何度かあった。だが、骨のない葬儀は、一度きりだった。

高校二年生の秋のことだった。

雲一つない快晴の正午、丁度四時限目だった。だが、教室にはいなかった。保健室にいた。

三限目が終わると同時に教室を抜け出した。紛れもなく仮病だったが、保健医は不真面目な生徒に構う余裕はないといった様子で、腹が痛いと言えれば、病床を使わせてくれた。

暇を持て余してベッドを右に左に転がりながら、時計の針が十二で重なるのを待って携帯電話を取り出した。

呼び出し音。また変わっていた。流行りの曲だった。

「もしもし」

気の抜けた声がした。

「俺だ、兄貴」

「ああ、わかったわかった」

兄貴は少し面倒そうに言った。

これで要件は済んだ。

十歳上の兄は街の会社に勤めていて、丁度昼休みの時間を狙っていた。

電話の切り際に、兄貴は言った。

「ほどほどにしとけよ」

上辺だけの軽い言葉だと思った。

保険医には兄が迎えに来ると言っていて、学校を出た。が、それは嘘だった。

人目を憚って裏門から出ると、大きく伸びをした。

どうにも学校が好きではなかった。

机を並べて勉強していると、ふと思う時がある。一体何をしているのかと。学校に通う理由がわからなくなっていた。だから、辛くなってしまう。

ざわざわと、杉の木が揺れている。

遠くの山から吹き下ろす風が肌寒い。

学校を抜け出して向かったのは図書館だった。

小さい頃から小説が好きだった。

特に生活の意味を見失っていたこの頃は、冒険とか苦悩とか恋とか、そういった非日常を感じさせてくれる小説の世界に溺れていた。

こうして毎日のように、日が暮れるまで図書館で小説を読み耽って過ごしていた。

小説家になれたらいい、そんな思いが芽吹き始めていた。

電車で揺られて一時間ほど、落暉が山並みに沈んでいくのを暗澹たる気分で眺めていた。

高校や図書館のある街から扇状地の田園地帯を上流の方へ。家は谷の入り口の近くにあった。

車窓からの景色の、杉の濃緑色と広葉樹の紅葉の斑模様を猛火のような色に塗りつぶしてしまう秋の落日は、心底嫌いだった。

最寄り駅についた頃には、随分と暗くなっていた。

釣瓶落としの縄を切ることができればと、いつも思う。落ちた冬が好きだった。

吹き降ろす風には、微かな厳冬の気配が滲んでいた。寒さに小さく身震いした。

街灯を辿って、家路を急ぐ。

ふと振り返ると、稜線の向こう側から赤黒い残照が庇のように広がっていた。

やはり心底嫌いだった。

夕餉を済ませてしばらくして、母が部屋にやってきた。父が呼んでいるらしい。

最初は適当に返事をしていたが、母が何度も言うものだから仕方なく居間に向かうことにした。

結論から言えば、悪事が一つバレていた。

頻繁に学校を抜け出していることを父親に知られてしまっていた。

そして、大いに揉めた。

初めて父親と殴り合いになった。

切っ掛けは父のある言葉だった。

「折角生きているんなら、しっかりしろ」

それを引き合いに出したことが、許せなかった。

その夜は激情の余波か、あまり眠れなかった。

肚の中に渦巻く吐露する場所のない感情を抱えて、携帯電話を開いた。

こういう時は、いつもこうしてアイツに吐き出していた。

「どうすればいい？」

電話越しに問い掛ける。帰ってくるのは、沈黙だけだった。

「答えてくれないか？」

それでも、アイツは答えてくれなかった。

白くて痛い風が顔を叩きつけた。

大分雪が強くなってきていた。

夜闇に街灯が浮かび、白く照らされた雪は煙のようだった。もう行く先も来た道もよく見えないくらいの降り方で、振り返ると足跡は既に消え始めていた。

「まだ……. くないのか？」

回顧に浸っていたからか、そんな言葉が口を突いたが、返事はなかった。白んだ言葉の残滓もやがて消えた。

父親との衝突の後、何とか高校を卒業し家を出るまで口を利くことは殆どなかった。

高校生の当時から、全てわかっていた。

あの時から小説は、建前だった。

学校とか社会とか、生来そういう中で生きていくのが苦手だった。確かにそれは難儀なことだが、小説家という目標——というか夢を口実に逃げてしまった。

だからあの時から小説は、幻想だった。

今日の昼間のこと、正午過ぎに兄から電話が掛かってきた。もうすぐ葬式が始まることだった。

兄は訊いた。

「久々に帰って来るか？」

「……. いや」

僅かに逡巡して、否を返した。

「そうか」

兄はそう言って、

「ほどほどにしとけよ」

と、取って付けたように加えた。相も変わらず中身のない言葉だと思った。

天候は益々悪くなっていた。

髪についた雪が冷たくて、手で乱雑に払った。

昔はしばしば中指の、ペンだこになった場所が痛んだものだが——。

ふと民家の庭先を見ると、腰くらいの高さの雪だるまを見つけた。

その家の軒灯は消えていた。こっそりと敷地に進入した。

雪だるまは石ころの目玉に青色のパケツの帽子が被せてあって、刺した枝に子供の手袋が百舌の速贄みたいに引っ掛かっていた。

惹かれるようにその雪だるまに触れようとして、その瞬間、ぽとりと上が転がり落ちた。鈍く重たい音がした。

俄かに怖くなって、その場所を後にした。

更に道なりに歩いていくと、馴染みのパチンコ店があった。

いつもは何とも思わない赤い電飾が、今日はいやに五月蠅かった。

この店が市街地と田園地帯の境界だ。

普段は行くことのないその先へ、街灯もない暗闇へ進んでいく。

小学校四年生の夏休みのことだった。

茹だるような昼下がり、友達のAちゃんとザリガニ釣りに出掛けていた。

Aちゃんは同い年の幼馴染みの男の子だった。昔から兄弟のような関係だった。血の繋がった兄とは十歳も離れていて、大学が忙しいようで最近あまり家にいなかった。そういった事情もあって、Aちゃんとはよく遊んでいた。

自分とAちゃんの家は裏山に背を預けるように建っていて、そこから下ると田圃が扇状に広がっていた。

畦道を進むといつもの小川に着く。水草の根元を目掛けて先にスルメを付けたタコ糸と錘を落とした。

魚釣りとはザリガニ釣りの大きな違いは、獲物が見えるかどうかだ。いつもザリガニ釣りでは、獲物がスルメを食べ始めたのを見て引き上げる。

「食った食った」

Aちゃんはしめしめといった声で笑った。だが、すぐには引き上げない。がっしりと掴んで離さないと見込んだ時にそっと釣り上げる。

「釣れた！」

そう言って、獲物を自慢げに見せてきた。

「大きいね」

「うん、大物だ」

Aちゃんはザリガニ釣りが上手かった。その後も要領よく釣果を重ねていった。一方、自分は不得手だった。網で採った方が早いと思ったことも一度や二度ではないが、Aちゃんに言わせれば「それが乙」なのだそうだ。意味は分からなかった。おそらくAちゃんも分かっていない。

それから直ぐのことだった。

「二匹目！」

そう言って、Aちゃんはザリガニを片手に澄んだ声で笑った——Aちゃんの笑い声が好きだった。鈴の音のように高く、澄み渡って、綺麗な声をしていた。不思議なもので、あれから何年経っても、記憶の中のAちゃんの笑い声は、成長期を迎えても玲瓏なままだった。

そうしてしばらくやっている、二人合わせて十匹ほど——うち八匹はAちゃんの釣ったものだ——釣れた。青色のバケツの中で赤黒いものがガサゴソと蠢いているのには心躍った。

次に向かう場所は予め決めてあった。

畦道をさらに進んで山麓の森に入る。此処ならば、人が来ることはない。

目印の大きな杉の木の根元に荷物を下ろす。

今回の目的は、ザリガニを食べることだった。

悪戯防止のライターに苦勞して、どうにか新聞紙に火を熾した。火が十分に大きくなると小鍋を置いて油を注いだ。

待ちに待った目的を達する時だった。

バケツからザリガニを一匹、甲羅を掴み、油の跳ねる鍋の上に留めた。決定的な未来を宣告するように十分に勿体振ると、手を離した。

油に落ちたザリガニは思ったよりも大きな音を立てて吃驚した。威嚇するように広げられていた鋏や腕は、やがて縮こまった。揚げられているザリガニは、まるで全身から泡を吐き出しているみたいだった。Aちゃんは歓声を上げた。

無邪気な残酷は次々にザリガニを油の池に沈めた。

「あんま旨くないね」

揚がったザリガニを食べてみると、少し泥臭くて味の薄い海老みたいな味だった。期待外れの味に、思わず本音が漏れてしまった。

「うーん」

Aちゃんは唸った。が、

「そうだ。塩を持ってきてた」

鞆から塩の小瓶を取り出した。

「これなら食える」

そうAちゃんが言うので、それに倣って塩をかけたらずい旨くなった。

「さっきよりも美味しい」

「将来は料理屋になるからね、こんなもんだ」

そう言ってAちゃんは胸を張った。

「そうだね」

そう信じて疑わなかった。Aちゃんはずっとその夢を口にしていた。

「そういえば」

Aちゃんは前置きしてから訊いた、

「将来何になるの？」

そう問われて少し困った。将来なれるものが数え切らないくらい沢山あることを知りつつあった。やりたいことならばある。

「自分の好きな小説を書きたい」

「小説家になるの？」

「.....たぶん」

だが、小説家というものをよく知らなかった。それが少しだけ怖いような気がした。

「お父さんの所の社長にならないの？」

父親は社長として工場を仕切っていて、この辺りではそれなりに有名人だった。

「.....それはお兄ちゃんがするから」

そう思っていた。父親は愛情に差をつけるような人間ではなかったが、自分と兄に向ける期待の差のようなものを薄々と感じ取っていた。その理由が会社であることも、少しずつ分かり始めていた。

「ふうん」

Aちゃんは曖昧な相槌を打った。きっとAちゃんには分からないと思うし、正直自分でもよくわかっていなかった。

「そうだ」

Aちゃんは思い付いたように、
「今度見せてよ、書いたの」
「.....いいよ、明日持ってくるから」
気恥ずかしかったが、そう約束した。
今書いているのは、冒険の話だった。
鄙に住む少年が、様々な困難を乗り越えて街に出て夢を叶える、というものだった。だが後半の、夢を叶える部分が上手く書けなくて、筆が止まっていた。どれだけ空想を膨らませようとしても、中身は真っ白で空っぽだった。
低く唸るような声が耳に届いた。それは遠雷だった。
樹冠に覆われた空を仰ぐ。陽の当たらない森の中にいたから気付かなかったが、空が随分と暗くなっていた。
ざわざわと森が騒めいた。
俄かに恐怖に駆られた。無意識の内に臍の辺りを庇っていた。
「Aちゃん、もうそろそろ帰ろう」
「そうだね」
Aちゃんは首肯した。
もう一刻も早く帰りたかった。幼い故の盲目的な危機感が、背中を這い回っていた。もしかすると、それは本当に身に降りかかる災いを予感していたのかもしれない。
その瞬間、嘗て聴いたことのないような耳を劈く轟音と、眼を焼くような閃光に襲われた。思わず身体を縮こまらせ丸くなって、視覚と聴覚を塞いでいた。
どれだけ経ただろうか。
やけに静かだった。
ゆっくりと目を開ける。
一見、あの目を潰すような光は幻のように消えていた。目を瞑る前と何ら変わらないと思った。否、そんなことはなかった。目の前に、確と残されていた。
杉の大木の老人のような樹皮と白い骨のような内部が、引き裂かれ中程から折れていた。
啞然。息を飲んだ。
だから、それは仕方のない事だった——気付かなかった。
ぱちっ、と小さく爆ぜる音がした。
見ると、焚き火が林床の落ち葉に燃え移っていた。落雷の衝撃で吹き飛んだ鍋が油を撒き散らした所為だった。
「Aちゃん、火が！」
「消さないと！」
Aちゃんは切羽詰まった声を上げて、火の始末に取り掛かった。それに追従する。
小さな火から踏んで消そうと試みた。だが、焼け石に水だった。火は次々に落ち葉を喰らって膨れ上がって行って、手が付けられなくなっていった。火に油を注ぐという句の再現は、本当に火の手が早かった。
「Aちゃん、逃げよう！」
ほとんど悲鳴みたいに叫んだ。

逃げる。そう思った瞬間、恐怖に支配された。涙が止まらなくなった。

現実を見ないように目を瞑った。そして走り出した。実際に瞑目したまま走ることはありえないのだが、後年に幾ら思い出そうとしても、走っている時の記憶はただただ真っ暗だった。

森の出口まで辿り着いた。木々の隙間に田圃が見えた時、蜘蛛の糸のような一縷の光を見出したような心境だった。

が、ふと気付く。

Aちゃんがいなかった。

「.....Aちゃん？」

胸中に冷たい隙間風が吹いた。

「Aちゃん！」

振り返って大声で呼んでも返事はなかった。どうやらはぐれてしまったらしい。脇目も降らずにここまで走ってきたから、Aちゃんのことには気付かなかった。

嫌な予感がした。

もし、Aちゃんが途中で道を誤って迷っていたら、或いは、怪我をして逃げ遅れていたら、まだ火を消そうと奮闘していたら。

曇天の下、田畑を吹き抜ける夏風は嘘みたいに冷たい。森の中は普段と変わらず暗くて涼しくて湿っていた。火の熱も光も、その気配など微塵もなかった。

ふと、思う。

あの光景は幻ではないかと疑った。

これは白昼夢だったのだと信じた。

そして、恐る恐る来た道に戻った。

だが、そんなものは小説よりも儂い幻想だった。

風通しの悪い森の奥には煙が渦巻き、その奥に赤い火が広がり続けている。地獄の入り口のように見えるそれは、子供にさえ死を直感させるには十分だった。

Aちゃんは何処にもいなかった。

蜘蛛の糸は自分の直ぐ下から途切れていた。

再び森の火から逃げて家に辿り着いた頃には、遠くからサイレンが聞こえていた。

母親を見た瞬間、涙が溢れてそのまま泣きついた。火事が起こったこと、Aちゃんと森の中ではぐれたことを伝えた。自分達が原因であることは言わなかった。

俄かに家の中が慌ただしくなった。

火災は怒り狂ったように森を喰らい続けた。最終的には翌日の全国紙に載るほどの事態になった。その場に雨が降らなかったことも不運だった。

Aちゃんはまだ家に帰っていなかった。

陽が沈み始めた頃のことだった。

その時の、庭先から見た光景が記憶に焼き付いて消えなかった。それから歳を重ねてもそれは、あの遠くから鳴り響くサイレンの幻聴を伴って度々蘇った。

宵闇の空に入道雲の残滓が薄く広がっている。それは地上の火事を映して赤黒く染まった庇のようだった。

Aちゃんはずっと家に帰らなかった。

山火事は落雷によるものとして処理された。

後日警察から事情を訊かれたが、決して真実を、自分の罪を告白することはしなかった。真っ赤な嘘を吐いた。

Aちゃんの葬儀が執り行われたのは、火事からしばらく立ってからのことだった。遺体が見つからず棺は空っぽのまま、御骨もない葬式は後にも先にもこの時だけだった。

自分の所為でAちゃんが死んだ。

そう思うと自責を感じずにはいられなかった。それは今でも——三十路を迎える歳になっても変わらない。

「まだ……くれないのか？」

思わず口を突いた。いつからか、これは口癖になっていた。

風も雪も酷くなって、礫のように打ち付けていた。次第に身動きが取れなりつつあった。

田園地帯を真っ直ぐ貫く道路、少し先の街灯の傍に、一本の大きな木を見つけた。滅多にここまで歩いて来ないから、その存在を知らなかったが、一休みできそうだと思うた

枝に積もった雪が落ちてくると危ないかもしれないが、もう随分と疲れていた。幹を背にして座り込んだ。ふと、気付く。杉の木だった。

子供の頃、猫を飼っていた。

現金な奴だった。餌をねだる時は甘い声で寄って来るのに、腹を満たすと触らせることも許さず、何処かに行って寝てしまった。それでも可愛い奴だった。

その猫は普段、飯と寝床を家の中に確保して、他は外で過ごしていた。だがある日、普段は寝るような時間にふらりと外に出た。そのまま帰って来なかった。

懐かしいと思った。あの猫は基本的に父を好いていたが、偶にこっちに来てくれることがあった。あの甘い鳴き声と柔らかくて温かい毛皮が、すぐそこにいる気がした。

走馬灯。そんな言葉の断片が、一瞬、脳裏を過った。

その時だった。

ずきり、と左手が痛んだ。それだけで十分だった。十分な理由だった。

——まだ……死なせては、くれないのか？

そう言って、笑った。愛おしかった。

ポケットから携帯電話を取り出す。時刻は、日付を跨いだばかりだった。悴んだ指で電話を掛ける。

数回の呼び出し音がして、

「はい、もしもし？」

アイツは電話に出た。耳馴染みの良い、高く澄んだ声だ。電話越しでも、その声が好きだった。

「俺だ。悪いけど迎えに来てくれない？」

大きなため息が聴こえた。

「いいけど、何処にいるの？」

「わからん」

図々しくも即答した。

「家から通りに出て、パチンコの所を越えて……」

「何か見えない？ 目印になるようなものは？」

そう言われて、辺りを見回して——その瞬間、あの日の光景を思い出していた。

「……赤い光」

譫言みたいに呟いた。

雪道を歩くのは遅々として進んでいなかったようで、パチンコ屋がすぐ後ろにあった。目を瞑って歩いていた訳もないはずなのに、またあの時のように——地獄の入り口のような火の渦から逃げた時のように——記憶がなかった。

真っ暗な夜闇だった。赤く煌々たるパチンコ屋の電飾は雪煙に反射して、天に至るほど大きく膨れ上がっている。

それは迫り来る火の壁のようだった。

もしあの火事を間近に見ていたら、こんな感じだろうかと思う。

しばらくして、

「何となくわかった」

アイツは唸るように言った。

「そこで待ってな。すぐに迎えに行くから」

そう残して、アイツは電話を切った。また風の音だけになった。

もう一度、あの赤い灯りの壁を見上げる。

小さく笑った。

「……ごめんな」

その言葉に、色はなかった。

通常作品

通常作品集

Pram

Pram

やわらか乳業

美しいものが好きです、世界とは美しくないものであふれており、私にはどうしてその、どうしようもなく不快感を煽る姿形がそのままに受け入れられているのか、全く分からない。今日もデニーズは黄色の看板をきらきら光らせ、それは眼球の裏をマニキュアの爪でかりかり引っかかるほど嫌ではないでしょうか。私は自衛的手段の一環として、車のガラスにそれが反射するたびに目をきつく瞑っていたので、私は家と学校を繋ぐ道の一部に何があるのかをまるで知らない。

私はいつからか学校に通うのを拒否し出したので、母は私を車に乗せて運ぶようになった。

病院の個室の多目的トイレの中で、どうにかため込んだ睡眠薬^{デパス}を掌に出した。特に理由はなく、明日も生きていく元気がないな、と思ったので、ええいせっかくならやっつてしまえ、と切れかけのバッテリーを使って体を動かした。

カバンに隠して持ち込んだジップロックの中身、薬のフィルムを一個ずつ、数週間分切って、手の上の錠剤のちゃらちゃらを、ミネラルウォーターで飲み干した。

一週間分の元気は喉に何度もつかえて絡まって、元気と引き換えの吐き気が喉元まで上がってくる前にやっつと飲み干せた。苦い唾液を何度か飲み込んで、手すりに体重を預けた。便器の

陶器の冷たさが末梢の冷えと混じり、よくわからなくなってくる。体の先の方から力が抜けて、芳香剤のレモンの匂いがした。

こういう自殺未遂というのは現実からの一時撤退なのだけれど、世間一般的には自殺未遂で、そしてこういうことをすると看護師に捕まって引きずり戻され、胃洗浄の果てに多かれ少なかれ拘束されるのがオチなのだけれど、私が目を覚ましたのはそのトイレの個室の、眠り込んだ便座の上のままだった。全ての毒を代謝した末に目を覚ました。朝だった。高窓から入る光は眠ったときと同じ明るさで、しかし病院の中はいやに静かだった。

扉を開いて外へ出た。廊下の窓ガラスは割れて床一面に散らばって、雪に似ていた。どこまでも人気はなく、いろんなものが人の手を離れて散乱している。

ナースステーションの正面、豆型の皿や生理食塩水のパックを蹴散らして、階段を上った。葉のせいで息が上がって、グリッジを脇の裏に映しながら歪んだ。

五階の踊り場の窓に張り付いて外を見た。真っ白な日差しを反射して眩しいコンクリートの上を、人が歩いている。素足、ハイヒール、スニーカーがそれぞれの靴底をすり減らして歩いている。脚をひきずる人も、脱臼したらしい腕を支える人もいる。弱い魚の群れのように、おびたらしい数の頭が並んでいた。

この町を東西に貫く大通りが、病院の前にも開いている。その西の突き当りは土嚢や合板製のバリケードで塞がれていて、そこに人が折り重なっている。大きな黒や灰色の塊から、小枝のように肉色の腕が飛び出して、上を目指しながら小さくうごめいている。

バリケードの向こうから何か小さいボールが投げ込まれて、鈍い爆発音の後、てっぺんにいた犬、女たちが横薙ぎに吹き飛び、内側から黒い血、臓腑が飛び散った。しかし、人の群れは這いずるのをやめない。私は唐突に胃液ばかりのゲロの味を思い出した。

○

チョークが黒板を引っかく音が昔から嫌いだった。ほんとうに怖いもの、例えば蜘蛛とか、水とか、犬とかであればもっと納得するような理論を作って自分を納得させられたのに、それはどこまでもただの音だった。大人になればそういうものが減るのかなと思ったけれどそんなことはなくて、一面に広がる水玉模様、学校のエアコンの中の空気の匂い、人の話し声、どんどん怖くないのに嫌なものが広がって行って、私自身それをどうやって止めたらいいかわからないから、黙って嫌が広がるのを見ていた。うっさいモンは無際限に増え、私を狂わそうとしてくる。

何かストレスが原因らしいけれど、学校を転校して新しい学校で友達が出来て、それでもやっぱり止まらなかった。というか、新しい学校の担任の先生の二者面談の時にふわふわしてくる柔軟剤の匂いが嫌になって、そのうち先生のことも嫌いになった。

○

猛暑日のぬるこい空気がある待合室で、ソファにかけた。爆発音が耳の中で反響するようで、しかし今、待合室の外では単に苛烈な蝉の鳴き声がするばかりで、私の見た景色すべてが何かひとつの長い夢のように思えた。入り口の割れたガラス戸から非常電源で動いているらしいエアコンの冷気が流れていく。すこし考えてみたけれどみんなのように西に行きたいという気持ちにはなれなかった。私みたいなのがみんなの中にいたら、すぐに違うってバレて、なにか恐ろしい目に遭うような気がしたから。

「だれ？」

女の声がした。反射的に声の方へ振り返った。柔らかくて甘くて、ホットケーキの上のメイプルシロップみたいな金色の声。

入院棟へ続く廊下はまぶしいくらい白くて、その中に女の子が一人、立っていた。すらりと長い手足は逆光を受けて暗く、ほの暗い茶色の髪は光と境界を失って、埃の星の中できらきら光った。

「あたしはヒナ。香山ヒナ。あなたの名前は？」

「.....メル」

「メルちゃん、メルちゃんっていうの。かわいい」

ヒナは私のそばに歩み寄る。知らない制服、ネコみみたいなグレーのセーラー服に、黒のプリーツスカートが見えて、もう少し甘い色をしたヒナの顔がゆっくりと見えてきた。病院の、人間を殺さないための臭いがする。べっこう飴の色の睫毛。

おばあちゃんが、死んだ生き物に触っちゃ駄目と言っていたけれど、ヒナは三〇センチ離れたところでも肌のおもてで分かるくらい暖かかった。お日様のようなだった。ヒナは私の目を見て、垢ぬけない黒ばかりのブレザーを見た。唇が薄く開いた。

「ぎゅうってしていい？ 人間を見たの、久しぶりなの」

「.....」

腕が背に回って、ぬいぐるみのように抱きしめられた。肩におでこがこつん、とくっついた。女の子はほんとうに、精神医薬のおかげで指の先が氷のように冷たい。

ヒナはちょっと溶けかけたイチゴのチョコレートを持っていて、私にひとつくれた。鼻血が出そうなくらい甘ったるくて、空っぽのお腹に落ちて行った。

散らばった週刊誌や新聞、はらぺこあおむしの絵本の中、床に固定された待合室の椅子だけが秩序を保って整列している。ヒナは遠くを見ながら口を開いた。

「メルちゃん、おなかすいたね」

「そうだね」

「ねえ、メルちゃんは、これからどこへ行くの？」

「どこ.....」

西に行きたいという気分にはなれなかった。西の果てに天竺があるとは思えなかったから。背伸びして病院の入り口を眺める。車の姿はなく、コンクリート・ブロックの入り口にばらばら蟬の音がする。私はどこにいくんだろう。

ヒナは立ち上がった。

「ヒナはね、モールに行くの」

「どうして？」

「アイス、食べたいから」

ヒナは、色あせた糖尿病患者向けの砂糖含有量を示したポスターを見ていた。だいたいアイス一〇〇グラムにつき二〇グラム、角砂糖五つぶん。

ヒナは病院の壊れた自動ドアをスニーカーで踏み越え、ビルの青い影に入りながらただら歩いた。三十二度の気温は人肌に近くて、大きな犬のお腹の中を歩いているようだった。私はそれを追いかけた。ヒナはこのあたりの土地勘があるらしく、しっかり目的地があるような歩き方をしたが、しかしヒナは目に面白いものが映るたびに止まって、いろいろなモノを眺めた。洗剤液の溶けた虹色の水、脊椎のような鉄骨、壊れたハイヒール、小さな折り紙の紙風船。ヒナは自分が見たいと思うだけそれを見て、あきたら止めた。私はヒナを眺めた。

町には普段から誰もいない空間が少なからずあって、それは自動販売機の前とか、深夜のゴミ捨て場とかで、その一瞬の光景がどこまでも続いている。全部偽物のようで、けれどところどころにある血痕、打ち捨てられたクツやカバンは嫌に現実の臭いがした。ヒナは木にくっついたセミを見つけて、思いつく限りのセミの名前（アブラゼミ、ミンミンゼミ、ツクツクボウシ）を言い尽くすと私の顔を見て笑った。

「ねえ、夏休みみたい、そうじゃない？」

「明日から夏休みだからだと思う」

「明日から？　じゃあまだ今日は、ただの普通の日ね」

ヒナは次の瞬間、会話を作っていたすべてに飽きた。数メートル先に落ちていたコカ・コーラの真っ赤な缶を拾って、蹴り上げた。空っぽだったからこおん、と軽い音がした。

○

「岩槻さん、また集会抜けたのね」

担任の教師は保健室のバインダーから、私の体調不良に関する紙を抜き取って、私に見えないように何か書きつけた。気持ち悪い、と言って集会を抜けたけれど、先生の前にいるといつも頭痛がした。今、紙に書き足したら先生は何て言うだろうとぼんやりと考えたけれど、沈黙はなくなるらない。

「.....岩槻さんはいつもひとりだから、先生、心配なの。何が嫌なの？」

ほんとうに私の嫌なもの、人がたくさん並んでいること、小さな声で話す声、それと、先生の好きな柔軟剤のお花の匂いです。先生は私が自殺したら面倒だなと思うのかもしれないけれど、私がほんとうに死にたくてたまらないのは先生の前で理解されるはずのない私の不快を我慢している瞬間です。言えたら楽だろうな、と思いながら、私はスカートの布を指先で挟んで、手悪さをした。伏目で保健室の木目を眺めた。

先生は憐れむように私の指を見た。先生は国語の先生だけれど、国語と言うのはみんなの使っている言葉のやりかたについて勉強する授業で、私はそれが分からない。

「なんで先生は、私が普通の子でいようとしてるのを邪魔するんですか」

「普通って、そうやって普通でいることにこだわるのは岩槻さんにとって一番辛いことでしょ」

先生は、いつも洗剤と柔軟剤の匂いがする。誰かにとって快い匂いを着ているけれど、それは先生の一等好きな匂いではないし、私の好きな匂いでもないでしょう。

先生はペン先を出さないボールペンでバインダーの表面を叩いた。グレイがかった

ローズの口紅が、ちょうどの形に見える。大ぶりに編まれた毛糸のカーディガンもグレイで、アイシャドウの色もブルー・ブラウンだ。でも先生の肌は薔薇というより綺麗な朱なのに。

「先生」

「何ですか」

「私は、先生はもっと赤い赤、朱色とかの方が似合うと思います。声もそうで、もっとハサミみたいに綺麗に切るような……そういう言い方をした方が先生に似合います」

先生は私を見た。強こわ髪^いの毛の真ん中、私のつむじを見た。

「私は、究極的には……自分の世界に他人の意識が介在するのが苦しいんです。私は、きっと社会に出れば……みんなが好き勝手に生きて、私のことなんか無視してくれるような、私が野良犬……野良犬のように生きていてもなにも気にしないような世界なら、十全に生きられるんで」

結局、世の中のほとんどすべての物が私のところに障るのだ。精神を^ながせまい、^ながせまいと音や色を使って、私の目に触れてくる。

「……私に、これ以上普通に生きられる、まだ普通になれるという希望を抱くのはやめてほしいのです……わたしは、わたしはそんなに出来た人間ではないから、困ってしまうので……」

国語が苦手だから、言葉と言葉の綺麗な並びが壊れないように結ぶ糸が、話すそばから切れてしまうような感覚があった。いろんな言葉を使っても、いや使えば使うだけどんどん本当に言いたいことから遠のいていくような気がした。ほんとうに大切なことは目に見えない、ほんとうに大切な言葉は耳に聞こえないのかもしれない。先生の顔が怖くて見られない。初めから見えなければよかったのに、と思った。

「……つまり、放っておいてほしいんです、もう、先生のどうにかできるような、出来た子じゃないので……」

○

モールのエスカレーターは全部止まっていた。「逆走しちゃだめなのに、どっちが本当の向きかわかんないのね」とヒナは言って、ビートルズの「ヘルプ」を歌いながらエスカレーターを上った。天井の吹き抜けから降る日差しが一階の真ん中にある噴水を照らして、それを円形に囲む店のひとつひとつは洞窟のように暗い。

サーティワンは階の隅にあった。ショッキングピンクの看板は遠くからでも良く分かる。灰色のショーケースの中で、アイスクリームは液体になっていた。ヒナはガラス越しにアイスが入った円筒状のケースを見つめ、毒色の水たまりになったクリームを寂し気に見つめた。

「ヒナちゃんは、何食べたかったの」

「ヒナは、ヒナは……冷たいものが食べたかったの、冷たいの、アイスが溶けるのって好き」

確かに、ラムレーズンなんかはとろんと甘くて眠るのに似た感じがする。極端に酒に弱

いだけかもしれないけれど。ヒナはメニューの描かれた綺麗な紙を広げて、限定フレーバーを確認し始めたので、私が道中でカルディから拝借したボルヴィックのペットボトルを投げた。ヒナはおとなしく中身を飲んだ。

ヒナは続いて、停止したエレベーターを上って三階の家具コーナーを見物することにしたらしい。照明が消えて薄暗い中、ぼんやり境界を失ったマットレスやカラーボックスが、店員にしか分からない規則で並んでいた。薄暗いところに値札があると、どうしてか全部偽物のように見えた。

ヒナは唐突にスニーカーを脱ぎ捨てて、ベッドに飛び込んだ。ふわっと体が浮き上がって、スプリングが軋んだ。

「病院のよりずっとやわらかい、ねえ、見て」

手をつく私の重さの分沈み込むように柔らかかった。家ではない匂いの中、恐る恐る寝転ぶとすぐそばに蛍光灯があって、面白かった。制服でじっとり張り付く制服にシーツの綿が触れて、体温がほんの一瞬、体を離れるのが心地いい。甘い匂いがする。ヒナはくくくと喉を鳴らして笑った。

「ねえ、お泊り会みたいじゃない？」

「お泊り会？」

「幼稚園の部屋にみんなで布団を敷いて、歌を歌ってから寝るの」

ヒナは何か童謡を一フレーズ歌った。ヒナの声はすこし掠れていて、甘ったるい。舌つたらずな喋り方も相まって奇妙な色気があった。ヒナの海馬は眠ってしまったらしく、もうそれより先のメロディーが出てくることはなかった。ヒナは程なくして眠ってしまった。

私とヒナはずいぶん長い間動いていたような気がするが、しかしいっこうに日は高く、かんかんと照っていて二時間も経っていないように思えた。酷く暑いけれど、今手に入る冷たいものなんて見当もつかなかった。電気って冷たくて、時間を短くしてくれるものなのかもしれないな、と思った。

ヒナは穏やかに寝息を立てていて、いっこうに起きる気配がなかった。人のおいがした。私はベッドのそばに脱いだローファーを拾い、もう一度エスカレーターに向かった。

私は四階のおもちゃコーナーから子供用の望遠鏡を探してきて、窓辺の光で説明書を読みつつ組み立てた。そしてやっとできたそれでガラス張りの窓際から外を眺めた。人の群れ、バリケード。バリケードはどうやら町を円形に囲むように作られていて、西側がいっとう高い。今も応急処置的にいろいろなモノ——オフィスチェア、発泡スチロール容器などが積み上げられて、どんどんバリケードは高く高くなっていく。簡単に壊せそうに見えたけれど、壁のこちらがわの人々はそれをやるだけの元気がないらしく、そのへんで疲れて転がって、踏みつぶされていた。

○

体育大会の日、皆で揃いのTシャツを作って写真を撮った。けっこう初めの方からどうしてこういうことをやるのか良く分かっていなかったが、まあTシャツを着てにこにこしていればあらかたどうにかなった。女の子は写真を撮るのが好きだから、皆での集合写真、チョキの形を合わせて大きな星を作った写真などを何枚も、連射で撮って、それを複数名でやるからえらく時間がかかる。

写真が嫌いだった。私の写真が誰かの電子媒体に記録されて、私の意志でそれを消すことができないのが怖かった。本当は紙の写真も怖かったけれど、それを自覚した瞬間に動けなくなってしまいそうだったから（私に関して撮られた写真はみんなの卒業アルバムや遠足の写真などを合わせればとほうもなく多かったし）考えないことにしていた。笑顔を顔に張り付けて、自分がどう見えているかということを頭の中でシミュレーションして、やっと写真を撮り終わったと思ったら、今度はそれぞれが小さなグループを作って写真を撮り始めて、その小さなたくさんの輪の中、どこにも私はいない。

○

振り向くとヒナが立っていた。望遠鏡だけを見つめて、私の姿はもはや視界になかった。接眼レンズの前を譲ると、ヒナはすぐに覗き始めた。何秒か群衆を見つめ、すぐに別の方角にレンズを向けた。思いきり空を向いている。

「太陽は見ちゃだめだよ」

「どうして？」

「眩しすぎて、目が焼けちゃうから」

「そうなの、つままないのね」

ヒナは踵を返して、暗いエスカレーターへと歩いていく。私たちのいた証拠、望遠鏡をそのままに。

次に私たちはあちこちをぐるぐる回って、ヒナは洗濯用洗剤、人間用の石鹼、大きなジョウロを、私はお中元用のフルーツゼリーとキャンプ用のランタンを手に入れた。ヒナは薪を燃やしてマシュマロを焼こうと提案してきたが、私もヒナもマッチを使えなかったのであきらめた。

一階の噴水の水は昼間のうちずっと温められたおかげでぬるこくなっていて、ジョウロにくんで頭からかぶればシャワーになった。

ヒナは服を着たまま、スズメのように水に浸かって、どこか海外の石鹼でシャボン玉を作ったり、知らないラベルのシャンプーを試したりした。それに飽きると、噴水の中でしゃがみ込んだまま服を一枚ずつ脱いで、こんどはほんとうに裸になった。傾きだした日の中で、ヒナの長い手足が赤く見えた。

ヒナは私の手を取って、指と指のあいだに自分の指を滑り込ませて、強く握った。ヒナとのあいだにあったぬるい水が手のひらのあいだからするりと逃げて、魚のようだった。大きな噴水はバスタブというよりベビーバスのようなのだなど、漠然とそう思った。

「晩ごはん、何にする？」

「ゼリーでしょ」

「ヒナはさくらんぼにするから、その他から選んでいいよ……」

きゅ、きゅと柔らかい手が私の手の内で姿を変えた。ヒナの手のはらは大きくて、私とびったり合わせようとしても長さが余ってしまう。だから、綺麗に合わさらない。石造りの噴水に足が擦れるたび痛くて、ヒナはどうとう、そうやって遊ぶのに飽きた。水の中から立ち上がった。ふっくらと肉の付いた、綺麗な体だった。

ヒナは濡れた体のまま歩いて、傍らに投げ捨てたスクールバックから何の飾り気もないスマホを取り上げた。デフォルトのままの背景画面、ヒナは通知を確認すると、すぐに電源を落としてしまった。

「……ヒナちゃん、携帯持ってたんだ」

「うん、家族がくれたの」

ヒナは家族を指折り数え始めた。お父さん、お母さん、お兄ちゃんがふたり。お兄ちゃんとはずいぶん歳が離れているから、典型的な末っ子として大事に育てられた。お父さんもお兄ちゃんもいつもヒナに優しく、ついわがママをきいてしまう。お母さんがかわりに怒る。でもヒナはお母さんのことが嫌いではない。ヒナのことを心配して、いつも学校の持ち物や身だしなみを整えてくれる。朝に寝坊したら起こしてくれるし、お母さんの料理は美味しい。

私は水から引きあげて、髪の水を絞りとった。下着店から拝借した、新品の上下を身に着ける間、ヒナは夢遊病のようにずっと家族について喋った。シフォン地に黒いレース、小さなりボン。可愛くて反吐が出そうだった。

「ねえヒナ、ヒナは病院にいたんでしょ？」

「うん」

「お父さんもお母さんもいて、お兄ちゃんもいて、それなのにどうしてヒナだけ病院にいるの？」

「……」

ヒナの和毛から大きい水滴が落ちて、フロアの上に出来ていたシャボン玉を壊した。西日を受けて、シャボン液は単に朱色っぽい単色に見える。

「ヒナ、私たちはきっと、人の世界で生きるのに向いてないんだよ、皆ヒナのことを邪魔って思って、だから病院に閉じ込めたんじゃないの？」

ヒナを優しく美しい子に育てた家族のもはや偏執に近い慈愛を、この一瞬で全部壊してしまうのは、気が狂うほど気持ちが良かった。

「私たち、きつとここならうまく生きていける、そう思う。私とヒナ、二人でいればひとりぼっちじゃないし」

ヒナは携帯の電源を入れた。ホーム画面に通知はない。もしかするともう圏外になっているのかもしれない。ヒナは画面を切って、もう一度点けた。通知はやはりない。ヒナは口を開いて、やっと声がするようになった。

「……あのね、人は死んだところから腐っていくの、町もそう。人の死んだ建物から順番

に腐る。このモールもそうで、今はみんな新しい偽物みたいに見えるけど、ちょっとずつ腐り始めるでしょ？ だから、ここにいたら穏やかに死ぬだけ。メル、あなたがほんとうに欲しいのはいっしょに落ちていく仲間じゃなくて、この世界への執着でしょ……」

私は私の中にある、嫌の塊をヒナに噛み砕いてほしかった。母親でさえ出来ないそれを、なぜかヒナなら出来ると信じ込んでいたのだ。

ヒナはサクランボのゼリーをひとつ食べて、今日のぶんの薬を飲んだ。劇薬は小さな、毒のような色のカプセルに入っている。その後、化粧品売り場の小さな箱を無造作に集めて、ひとつひとつ手の皮膚に塗りつけて色を見た。静脈の青が透けたような、白くて青い肌にいろんな口紅の色、粘膜の色が重なって汚れた。ガス・ランタンの明かりは自然光に程遠くて、それでももう人がいないこの町で、ヒナはいっとう綺麗に見えた。死に化粧だった。

私に、ここで何が出来るだろう。この町の狂った人間たちだっていずれ処理されて、町は元通りに戻ってしまうだろう。私のやっていることはただの現実逃避で、私もいずれヒナのように現実に戻らなければならない瞬間がくる。今、人を殺してもバレないだろうなどと思った。ヒナが私を殺そうが、私がヒナを殺そうが、もうそれを見ている人はないのだ。

噴水の側、ガラスの散乱するフロアは、ガス灯の光を受けて星月夜のようにきらきら光った。密に詰まった、熱帯夜の空気は甘ったるい匂いなのに味はなくて、化粧品に似ている。

化粧落としが無かったから、化粧水で安い色付きリップクリームの色を落とした。口紅を手取る。宝石みたいにカットされたプラスチックの中には、たっぶりサクランボ色のリキッドルージュが詰まっている。ブラシにたっぶり持ち上げて唇に触れ合わせると小さく水の音がした。素敵な赤。セルロイド・フレームの眼鏡みたいだ。淡くてくすんだ私の唇は、プールの水面の一瞬のきらきらになる。

床に落ちた鏡は小さなヒビがいっぱいに入って、私の唇はコラーージュのように小さな欠片の集まりに見える。大きな鏡で見ようか。フロアに散らばるガラスの欠片の大きいのに自分を映す。口元の赤は切り抜いたように垢ぬけて、やっぱり青いクマに似合わない。「どう？ その色、すき？」

私の後ろにヒナがやってきた。大げさなくらい首をかしげると、細くて柔らかいセミロングが濡れて、胸元に張り付いている。猫みtainな灰茶の髪。ヒナのためにガラスの前を空ける。

「……好き」

「そう！ ヒナもすき。だけど」

ヒナの唇はもうすこし甘ったるい、グレー交じりのピンクをしていた。その間から見える舌も、ほんのりと薄青いバラの赤。それがちろりと唇を舐めた。

「これ、美味しくないのが嫌い」

ヒナは裸のまま笑った。飲み込んだ唾液に脂が溶けて、化粧品の味がした。薬の味に似ていた。

○

明日着る予定の、体育祭用のクラスTシャツは真っ赤で、白いインクで全員分の名前が描いてある。私の名前は「める」で、上の方に書いてある砕けたあだ名の群れには入れない、ただのめるだ。群れからはぐれる勇気も出なくて、出ないから前の晩、ひとりで肌に剃刀を走らせる。伸びては剃ってを繰り返すうちに体中の毛は小さい針のようになって、何度も剃刀を当ててやっとな見えなくなる。刀はときどき肌を傷つけて赤い線を作って、赤い球のような血を作った。

死にたいというくせに、肌が湯に浸かる瞬間に傷を無意識的にかぼって、じんわり熱い痛みが肌の深層に染みこむのを嫌だと思う。馬鹿らしい。歳をとるたびにどんどん清潔という言葉、身だしなみということばが大きくなっていく。もう毎日化粧水をはたいて寝るの、肌に切り傷を増やすのがしんどい。クラスのみんなども先生も、お母さんもすごい。毎日、明日の自分のために化粧をして、化粧を落とす。明日のことなんてなにも考えずに生きていけるほど強くなればいいのだろうけど、でもそう決めるだけの元気は死んだ。

○

ヒナは一人で出て行った。いくつかのお菓子と水をスクールバックに詰め込んで、綺麗に化粧をして、濡れた制服を着て出て行った。

私はそれを見送って、今にも融けてしまいそうな体を三階まで引きずって、一人でベッドに寝転んだ。すぐそばの天井が迫ってきそうで、そのくらい暑い日暮れだった。ベッドの上にひっくり返したカバンの中身が散乱していて、指先がイヤホン、筆箱、教科書と順に触れて、最後に奥底にしまっていたスマホに触れた。

スマホは微弱な電波を拾い上げていて、この町のバリケード一带に焼夷弾を落とし焼きつづす、古典的な空襲作戦の実施をアラートしていた。避難場所に関する情報が果てしなく続いたから、ニュース記事を閉じた。指先で薬のフィルムを探して、しかしもう指が上手に動かなくなっていた。私は頭がおかしいから、皆がおかしくなるような何か——ウイルスか何かだろうか——すら上手にうつらなくて、こうして一人になっている。野良犬のくせに、野良犬とさえ上手く群れられずに死ぬ。硬いフィルムを破ると、硬いプラスチックが破れてもう一錠出てきた。真っ青な、プラスチックみたいなカプセル。唾液でむりやり飲み込むと、喉につかえて苦しくて、今にでも薬の触れた部分から、焼き付くような粘膜の炎症が始まる。私は目を閉じた。

了

疫病の詩三篇

疫病の詩三篇

雪兎

壺

どうも鈍くていけません
キンモクセイの香も
曼殊沙華の紅も
夜明けの静けさも感じぬまま

擦り硝子の戸が開きづらくなって漸く

あ、冬だ

なんて気が付いたのです

式

鉛筆とノートと
それから
甘く香り立つ淹れたての紅茶

辞書とパソコンと
それに
今日はコーヒーにしたいわ

甘ったるい炬燵に
昼下がりの雪解けの音
外で猫が鳴いて

玄関でチャイムが鳴って
こんなにけだるげに喧しいのに
一番欲しい音はない
一番欲しい匂いはない
一番欲しいあなたはいない

参

三十分
起きる時間が遅くなって
三十分
眠る時間は早くなった

三倍
画面とにらめっこする時間が増えて
三分の一
外に出る時間は減った

三週間
外へ出ない日が続いたら
三時間
人とすれ違っただけでくらくらした

三十分
あなたと画面越しに話す時間は増えたけど
三回も
デートの予定は潰れたし

三十分
一日にあなたを想う時間は増えたけど
三百日
ずっとあなたには会えていません

あとがき

今このご時世でしか書けないものを書きたい気持ちと、早く堂々と外に出たい気持ちしか詰まっていない作品になりました。

痛みを覚える

痛みを覚える

私は、痛みに弱い人間だ。

起きて早々にひねった足首をさすりながら強くそう思った。

ベッドのそばでしゃがみ込んだまま、カーテンの隙間から見上げる空はすっかり青。太陽も結構高い場所から一人暮らしの1Kを見下ろしている。

神様、午前休に甘えて二度寝した罰ですか。なんて現実逃避してもじんと響く痛みが消える訳もなく。うるんだ視界で、前に使った後どこに片付けたか曖昧なシップを探し始めた。

多分ここだろうと目星をつけた引き出しの奥から見慣れた外装の箱を発掘する。よかった、まだ残っていたと安堵して一つ取り出し貼り付ける。途端冷たさが爪先まで駆け抜け、情けない声がもれた。

持っている時は大丈夫なのに貼ると冷たいの本当にやめてほしい。心臓に悪い。誰に向けていいのか分からないクレームを今回も胸中に浮かべながら二枚目のシップを貼り終えた。

右側に傾きつつ立ち上がり、ベッドの上に放り投げたままだったスマホを手取る。少し遅めにかけてあったアラームはまだ鳴ってないのが逆に虚しくなる。通りで起きた時だけはすっかりしていた訳だ。あの爽快感を返してほしい。

ふて寝したくなる気持ちを抑えて髪をかき上げ、出かける準備を始める。午後からは授業があるし、その前に友人との待ち合わせもあるのだ。

人との約束がある日に限ってこれだからなあ。

さっき貼ったシップが剥がれてない事を靴下越しに確かめてため息をつく。行ってきます、と返事の無い部屋に残して鍵を閉めた。

外の風は思っていたよりも冷たくて。そういやもうすぐ冬じゃん、と夏季休暇のせいで微妙にズレた季節感覚を痛感して、いや実家にいた頃も雪が降るまで気にしてなかったようなと思い直す。風が入らないように気持ち襟元を閉めつつ、どうでもいい事を考えながら歩いていけば待ち合わせ場所まではあっという間だ。

学食前に着いてスマホを確認すると、約束の十三時までまだ五分くらい余裕がある。五分前行動なんて懐かしいフレーズが頭に浮かんで、すぐスマホと一緒にしまい込んだ。

適当な柱に背中を預け、午後の授業に急ぐ人の流れを眺める。あの流れに巻き込まれなくてよかったと喜ぶべきなのか、それとも流れの一部にすんなれない人間なのだと嘆くべきなのか。自分がちっぽけなものになった感覚と共にそんな事を考えつつ、人の流れから目を離さないでいると流れに逆らう一つの人影を見つけた。

目を凝らすと、それは待ち合わせ相手の坂下真由美だ。彼女の姿を見つけたのはいいけど、声をかけるには微妙な距離で。はてどうしようと躊躇っているうちに彼女は視線をこちらに向ける。

力の抜けていた彼女の表情が一気に明るくなった。手を振りながら歩みを速めるその姿に肩の力が抜ける。吐き出した息が思っていたよりも長くて。余計な事を考えてたせないかな、って結論付けて手を振り返した。

ピークを過ぎて人がまばらな学食の窓際を二人で陣取る。毎週火曜日、午後一番目の授業がある時間帯に遅めの昼ご飯を食べてから次の講義室に向かうのがいつもの流れだ。

彼女とご飯を食べるようになって半年くらい経つけど、サークルも含めて結構な頻度で会っているのにそれでも話題は尽きないもので。今日だって、語学のおっちゃん先生のネクタイがファンシーな柄だった、とかしょうもない事を言いながら真由美はのんびりと大学芋を味わっている。

あの先生この前鮭のネクタイピン付けてたよ、って相づちを打ちながらカボチャプリンを口に運んでいると不意に彼女の袖口が目に残った。

薄い色の布地に、じわりと染み込んだ赤黒。箸を動かした時にちらりと覗いた手首には斜めに走る赤い線が一本ある。

落としそうになった箸を引き留めようと力を入れた指先が、徐々に冷えていく。

「手首、どうしたの」

飲み込んだ息が漏れ出るのにつられて言葉が出る。返ってきたのは、手首い？ という間延びした声だ。

「さっき角にでもぶつけたかな」

袖を覗き込みながら彼女は他人事みたいな口振りで笑った。焦りも驚きもないその反応に、これ以上言及する勢いも勇気もそがれてしまう。

「気を付けてね」

視線を伏せて、たった六音。それを口にする間も心臓が脈打つたび右手首に鋭い痛みが走った。

月曜日の朝もしんどいけど夜もしんどい気がする。

また一週間が始まったという事実が割と重くて、生乾きの髪のままベッドに寝転んで深呼吸していると前触れもなくチャイムが鳴らされた。

動きを止めて、何か注文したっけ、なんて考えてみたけどそんな覚えはない。親からの荷物送ったよメールも今月は無かったはずだし。

また宗教勧誘かとうんざりしながらモニターを見る。見て、そっちの方がよっぽどマシだと心底思った。

写っていたのは真由美だ。外廊下の電灯に照らされて白く浮かび上がっている彼女の顔面を、赤色が伝っていた。

今開けるからと半ば叫びながら玄関に急ぐ。靴を踏みつぶしてかじりつくようにドアノブを掴んで、その冷たさと手ごたえで鍵をかけたままだったと遅れて思い出した。

鍵を外す手が震えて、なかなか開けられない。ついさっき見た赤を思い出すだけでこめかみの奥がキリキリと痛んで、肩が強張る感覚がする。

「夜遅くにごめんねー」

ドアとインターホン越しに聞こえてくるいつものトーンが逆に私の気持ちを急かした。

力任せに開けたドアが真由美にぶつからなかったのは不幸中の幸いだと思う。やあ、と手を振る彼女は声色通りいつものテンションで、でも血は彼女の顔を流れている。視覚と聴覚の食い違いに脳がバグる。とりあえず入るよう促すと、彼女はお邪魔しますと気恥ずかしそうに小声で言った。

ハンカチであご辺りを覆ったまま洗面台に直行した彼女に、ウェットティッシュとこの前買い足したばかりの絆創膏を渡す。何があったの？ と聞けば、転んでおでこ切った、ってとても分かりやすい説明が返ってきた。

「全然血止まらないから、近くだし寄らせてもらっちゃった」

「いやもう遠慮しないで来て」

間髪置かずに言うと、彼女の背中越しに笑い声が聞こえてくる。

笑い事じゃないでしょと言いたい気持ちを抑えて、こっち向いてと声をかける。素直に振り向いた彼女の顔にはやっぱり拭き残しがある。よくよく見れば膝や手のひらも擦りむけて血がじんわりと滲んでいる。

痛いだろうに。でもそれを口にすると更に痛くなる気がして、せめて傷口をこすらないように所々残っていた血を拭き取る。

ハイ終わり、とほっぺに添えていた手を離す。ありがとうと笑って、かと思えば彼女はくると背を向ける。そしてハンカチをさっとすすぐと固く絞ってポケットにしまい込み、早々に玄関に向かった。

「送って行こうか？」

「平気。ありがとね」

それじゃあまた明日。

いつものように二、三回手を振ると、真由美は普段と変わらない足の運びで一切振り返らずに歩いていく。

真由美は結構強いのかもしれない。少しさみしく思いながら、手前の角を曲がっていく彼女の背中を見送ってドアを閉めた。

ゆっくりと鍵をかけ、ドアに両手とおでこを付ける。そのまま深呼吸を繰り返すと、心臓が落ち着いていく音と、余分な力が抜けていく感覚がした。

ベッドの上に戻り、念のため石鹸でちゃんと洗った手を電気にかざす。この手はついさっきまで自分じゃない人に触れて、手当てしていた。きっとそれだけじゃなくて、誰かを優しく抱きしめる事も出来るはずで。

そこまで考えた所で歯を噛み締める。乾燥していた唇が小さな音を立てて裂けた。舐めると鉄臭さとしょっぱさが舌先を、遅れてちくりとした痛みが唇を刺す。

この痛みは罰だ。傷付く事ばかり怖がって誰も抱き締めなかった私への罰だ。そう思う事にした。そう思わないと耐えられなかった。

目を開けて、見慣れた天井を意味もなく眺めて、もう朝だと頭が理解する頃、電子音が鼓膜を叩く感覚にようやく気付いた。

枕に顔を埋めたままスマホを探し、少し遅めにかけてあったアラームを止める。今日は火曜日、真由美との待ち合わせがある日だ。

昨日裂けた唇はまだ少し痛かった。

真由美がおでこに絆創膏を貼っている以外はいつもと変わらないお昼を過ごして、授業まで暇だからと購買に寄ったその帰り道のこと。

真由美じゃん、とすれ違いざまに女性の声が飛んできた。呼ばれた本人はそっちを振り返ると、相手の名前を呼んで両の手のひらを向けた。

途端、破裂音が二人の間で鳴る。音の強さにびっくりして、それがハイタッチだと気付くまでの間に二人は再会の挨拶を済ませていた。

「久しぶり。元気？」

「元気よー」

「てかまた転んだの？ 鈍臭いなー」

絆創膏を見るなり知り合いらしきその女性はケラケラ笑い出す。かと思えば、真由美の肩を結構な勢いで何度も叩きながら世間話を始めた。それが平常運転なのか真由美もそれに言及しない。

激しいハイタッチの音で身が竦んだままの私は置いてきぼりになって。それに気付いたのか、女性は首を傾げた。どーしたの？ と聞かれて答えに詰まる。どう言葉にしようかと考えているうちに、女性は何かを納得したみたいに一つ頷いた。

「仲間に入れてほしかったのか！ はい、手上げて」

右手を掴まれ、引っ張られるままにハイタッチする。さっきくらいの音がすぐ目の前で鳴って、それに見合った衝撃が手に響く。

痛い、と気持ちより先に言葉が飛び出した。

じわじわと痛みと熱が手のひらを覆う感覚に言いようもない気持ち悪さを覚える。とは言え今のハイタッチで二人の話を遮ってしまったのは事実で。お気になさらずと言おうとして、それよりも早く真由美は女性との話を切り上げていた。

「この後授業だからもう行くね」

「ん。じゃーね」

早口で会話を締めて、相手の返事を聞くか聞かないかのタイミングで彼女は私の背を押して校舎へと向かう。

つい振り返って女性の方を見ると、そっちも会話の短さは気にしてない様子でさっさとその場を離れていた。

早めに着いた講義室には私達以外誰もいない。無言のまま二人並んで定位置に座る。恐る恐る顔を覗き込むと、彼女は珍しく気まずそうな顔をしていた。ごめんね、と静かな部屋に彼女の声が響く。

「あの子、悪い子じゃないんだけどね。昔から力加減が苦手で。うん、ごめんね」

「大丈夫。そっちこそ手、痛くない？」

「ああ、うん。挨拶みたいなもんだから」

もう慣れたよ。まだ赤みが残る手をひらひらと振って、いつもの表情に戻りながらそう言う彼女の姿にどこか違和感がして、一つの仮説が頭をよぎる。

それって、昔は痛かったってことじゃないの？

そこからは連想ゲームみたいに嫌な予感がつながっていく。転んだことを話していた昨晚の様子、さっき私がハイタッチした後の反応、今の謝罪の言葉。そのどれもがほの暗い意味合いを持っているように見えてくる。

真由美は強いんじゃない。自分の痛み気付いてなくて、その分自分じゃない人の痛みがつかないんだ。

そう考えてしまって、それだけで勝手に涙が出てくる。声を出さないようにしていたのにすぐバレたみたいで、真由美は眉をまた下げて手をそっと私の肩に置いた。

「ごめん。やっぱ痛かったよね」

さっきの事を自分のせいだと言わんばかりに謝る彼女の姿が、さっきの考えを確信に変えていく。

ハイタッチした手はもう痛くないよ。真由美のせいじゃないよ。

それだけでも言えば彼女の誤解は解けるはず。頭では分かっている。それなのに、今の私は首を横に振ることしか出来ない。きっと彼女は泣いている理由を問うから。そして素直に話してしまいそうだから。

傷付く人を見て苦しむあなたのように、私は今あなたの傷で苦しいのだ、なんて。そんな事を今の真由美に言ったら追い詰めてしまうだろう。だから今は。

いつだか痛んだ手首がまたずきりと脈打った。

後書き

優しい人になりたいです。でも甘やかすだけの人にはなりたくないです。いい塩梅って難しいですね。

ブラック・クロック・ダウン

ブラック・クロック・ダウン

香月日向

十二月十六日

私はお父さんとケンカした。ケンカの理由は覚えてないけど、とにかく、すごいケンカをした。「お父さんなんか大っきらい」って言っちゃった。お母さんは怒って「お父さんにあやまりなさい」って私に言った。わたしはあやまる前に部屋にとじこもっちゃった。でも、私はお父さんもお母さんも大好き。口がすべっちゃっただけ。だから、ちゃんと仲直りしたい。

昔、世界中を巻き込む大きな戦争があった年も、クリスマスだけは戦うのを止めて、ちがう国の兵隊どうしてクリスマスを祝ったって聞いた。どんな国の人も、子どもも大人もみんなが幸せになれるクリスマスが、私は大好き。だから、なんとかクリスマスまでに仲直りしたい。そしたら、一緒にクリスマスマーケットに行こう。コツコツためたおこづかいで、お父さんとお母さんにプレゼントを買ってあげよう。いつももらってばかりだから、今年は、私がプレゼントする番だ。

あしたはノートとパンを持って森に行こう。そこで、仲直りの方法を考えよう。早く来い、クリスマス。

私がくらす町に、クリスマスは来ませんでした。

中国河南省の森林内に発生した半径二〇キロメートルほどの亜空間は、強力な電磁波の嵐を放ち、あらゆる通信インフラと航空機の運航に著しい影響を与えた。空間を覆うオーロラのような光の幕越しに微かに都市のような影が見えること、電磁波嵐の中から多数の生命反応が検知されること、そしてその生命反応の中に、二年前にハドソン湾沖で消息を絶った未確認巨大生物の反応があること。それ以外、一切が謎だった。

七月の末に飛び込んできた仕事は、件の亜空間および巨大生物の調査だった。この仕事は、どうしてあたしの様な軍の下請けのさらに下請けに回ってきたのかは分からないが、相当なハズレ仕事であることだけは確かだ。リスクと手間ばかりかかり報酬は雀の涙。何より、反りの合わない人と一緒に仕事をすることが、報酬の少なさ以上にあたしを悩ませた。

オーロラを抜けると、そこは冬の森だった。重たい雪は車の行く手を阻み、視界を確保するカメラも電磁波でイカれた。予想外の積雪とマシントラブルで、亜空間に入って五分も経たずに特殊装備の四駆は行動不能になった。あたしは車を降りて白い溜息を吐いた。溜息と交代で入ってきた空気は、卵が腐ったような悪臭が混じっていた。泣き面に蜂の異臭に舌打ちする。

葉を落としたクヌギが並ぶ森を見渡すと、車の影に灰褐色の毛で覆われた三角形が揺れた。

「カナグちゃん！ 車壊れちゃったの？」

アニメみたいな声であたしに尋ねたのは、灰色の髪の子供だ。女の髪からは、三角形のオオカミの耳が飛び出ている。耳はレーダーアンテナの様にぐるぐる回り、あたしには聞こえない音にまで敏感に反応している。女の腰からは獣の尾まで生えており、もぞもぞと周囲の様々な情報に反応している。感覚の鋭さだけは信頼できそうだ。

「エンジンは生きてますけど、外部センサーはダメです。電磁波嵐には、さすがに耐えられなかったみたいですね」

今回の仕事の要で、同時に一番の不安要素であるのが、今車から降りてきた折口忍だ。歳はあたしより三歳上で、まだ大学に通っている。四年前に古いオオカミの妖怪・狗神と普通の少女が融合して誕生した半妖だ。悪魔や妖怪といった超自然の存在を全て「未確認生命体」と一括りにできる現代において、警察からは「未確認第四〇二号」と呼ばれている。

彼女に協力を求めたのは、彼女の妖怪の能力が今回の仕事に必要なからだ。神出鬼没という言葉の通り、鬼神や妖怪はある所にたちまち現れたり消えたりでき、量子物理学的に言えば「ワープ」ができるということになる。この力を応用すれば亜空間に移動することもできる。今回は狗神の半妖・折口さんの神出鬼没の力を借りて亜空間にやってきたのだ。

とはいえ、折口さんは行きと帰りの切符みたいな物なので、仕事の邪魔にならないよう大人しくして欲しかった。素人に勝手にうろつかれるのは困る。

あたしは肩から下げた愛銃・八九式 5.56 ミリ小銃を体に寄せる。強化プラスチック製のハンドガードの温かくも冷たくもない感触が指先に触れると、体がずっと戦闘モードになる。枝から雪が落ちる音、唸るエンジン音、木々を揺らす風、研ぎ澄ました神経から外界のあらゆる情報が入ってくる。それらのノイズをより分けた果てに、あたしが今一番聞きたくなかった音が聞こえてきた。無遠慮に雪を踏みしめる音が鼓膜を撫でると、苛立ちが尻から頭の先までびりりと這い上がってきた。

「折口さん！ あまり車から離れないでください！」

折口さんが森の奥へと走って行く。小さくなっていく折口さんの背中に、あたしは精一杯怒りを抑えた声をぶつけた。

「こっちから、人の臭いがする！」

だからって、もう少し慎重に動いてよ！ あたしは胸中でブツブツ文句を言いながら折口さんを追って走った。

前々から思っていたが、あたしは折口さんが結構嫌いだ。本人は自分を気さくで誰とも仲良くなれる人だと思っているらしいが、気さくさと馴れ馴れしきは紙一重だ。望まない人にとっては鬱陶しいだけだ。折口さん自身に全く自覚と悪意がないのが余計質が悪い。半妖とはいえ素人、それも気が合わない人を連れてこなくてはいけないことが、今回の仕事で一番割に合わない点だ。ホント、ツイてない。

折口さんは流石オオカミの能力を持つ半妖というべきか、風のような物凄い速さで雪の中を走った。一般人より鍛えているあたしも、いつの間にか数十メートルも遅れてしまった。この程度で息は上がらないが、雪道の全力疾走は結構疲れる。

ようやく折口さんの背中が近づいてきたかと思うと、今度はいきなりしゃがみ込んだ。ワープの疲れが出たのか？ そう思い駆け寄ろうとしたその時、折口さんがぱっと振り返ってあたしを見た。その顔は、普段よりも厳しい物だった。

「カナグちゃん銃しまって！」

折口さんの言葉に、あたしは反射的に八九式を背後に隠す。硬質な武器が、防寒着越しにあたしの背中に触れる。

「怖がらせたくないの……」

あたしが銃を隠したのを見ると、折口さんは再び前に向き直った。折口さんの肩越しに、今までで一番大きなクヌギの樹が見えた。

その、クヌギの樹の根元に、青い瞳の女の子が座っていた。ふわりと、甘い匂いが鼻に届く。女の子が飲んでいる、茶葉に乾燥した果実の果肉や皮を入れた紅茶の匂いだ。

「安心して、オオカミの耳はあるけど、オオカミじゃないよ」

折口さんは女の子に優しく語り掛けるが、女の子はハの字に眉を下げて申し訳なさそうな視線を投げてるだけだ。

「ごめんなさい……言葉が……」

女の子が話したのはゴリゴリのブリティッシュ英語だった。恐らく折口さんには英語に聞こえていない。「は？」みたいな顔で固まる折口さんに、あたしはインカム式の翻訳機を渡した。

亜空間の中に突如現れた町はサタルノタウンと言う名前らしい。煉瓦と木でできた時計塔が立ち並ぶ町の姿から、時間の神サトゥルヌスを連想してその名が付けられたそうだ。

女の子はイザベルという名前で、町の郊外にあるクヌギの森で、一人で読書をするのが趣味だという。彼女の家は宿屋をやっていて、その手伝いで彼女は観光客相手に町を案内する仕事をしていた。あたしたちは宿泊客が少ない冬にやってきた久しぶりのお客さんだったようで、イザベルはとても喜んだ。あたしたちは町の調査の一環だと思ってイザベルに案内をしてもらうことにした。しかしいつの間にか、あたしたちがイザベルに連れまわされることになり、コーヒー豆をデザインした時計の前に来る頃には、西の空が赤く色づき始めていた。

「この時計は、そこのグシオンさんってコーヒー屋さんが建てた物です。数字がコーヒー豆の形になっているんですよ」

「わあ可愛い！」

コーヒーミルク色の文字盤を見て、折口さんが本日何度目かの「可愛い」を発する。何度も聞いているせいで適当に反応しているんじゃないかと疑わしく思ってしまう。それとも、普通の女子大生なら「可愛い」だけで全部通じるということなのだろうか。あたしにはわからない。

「イザベルちゃん、楽しそうだね」

びよんびよんと歩くイザベルを見て折口さんがニコニコする。彼女のオオカミの耳は飛行機のように無警戒に倒れ、もう完全に観光気分である。もう少し緊張感を持ってほしい。あたしはコートの襟を開けて首元に冬の風を当てる。

正直時計は見飽きてしまったのだが、ここでイザベルに「もう観光は十分だからサヨナラしよう」と言えないあたしも弱い。子どもの元気は無限なのか、イザベルは青い瞳をキラキラさせながら個性豊かな時計の一つ一つを紹介している。その屈託の無さが胸にしみる。イザベルの大福みたいに白くて丸い頬を見ていると、嫌でも文句を飲み込んでしまった。

見た感じ、この町に際立った異常は見当たらない。イザベルたちが、この町が亜空間の中にあることを知っているかどうかはわからないが、普通に人が生活するのに十分な環境がこの空間には整っているようだった。

「さあ、この町のシンボルが見えてきましたよ！」

イザベルが指さす先には、今まで見てきた中で一番大きな時計塔があった。夕焼けに赤く染まる雲の下、黒々とそびえ立つ時計塔の姿に、あたしは文字通り息をのんだ。

「この町のシンボルで、市庁舎の時計塔『黒くじら』です」

今まで見てきた中で一番巨大な時計塔は、ただの建造物ではなかった。クジラに似た曲線を描きながら天に伸びた巨軀からは、ゴツゴツした分厚い皮膚に覆われた太い手足が地面に下ろされている。それらが一体となってゆっくりと上下に揺れ、時計塔自体が呼吸していることがわかった。

「カナグちゃん……あれ……」

「はい……」

その時計塔こそ、今回のもう一つの調査対象だった。消息不明だった未確認巨大生物、「クロノサウルス・ゼオ」というコードネームが付けられた時計と古代クジラの合成獣だ。ヤツはこの亜空間に潜伏し、町のシンボルに擬態していたという訳だ。

「面白い形の時計塔でしょ？」

「そうだね……クジラみたいでなんか可愛い」

明らかな緊張とわざとらしい明るさを持った声で、折口さんはまた同じセリフを言う。あたしは黒くじらを見上げるイザベルの顔をちらと見た。こんな巨大な怪物と隣り合わせで生活していて、この町の人たちは平気なのだろうか。視線に気づいたイザベルがあたしを見る。その顔は、夕闇のせいで暗かった。

「黒くじらが、私はちょっと怖いんです……黒くて、大きくて、飲まれてしまいそうで……」

冷たい風が吹き、イザベルの声をかき消していった。

その夜はイザベルの宿に泊まることになった。危なっかしい業界で生きてると、比喩でなく寝込みを襲われることもある。もしイザベルが巻き込まれたら、と考えるのは心配し過ぎかもしれないが、念のため別の宿を探そうとあたしは提案した。でも結局、久しぶりの観光客を全力でおもてなししたいと言うイザベルと、せっかくだからイザベルの宿に泊まりたいとゴリ押しする折口さんに二対一であたしは負けた。

イザベルの宿の食堂は意外と広かった。四人掛けのテーブル席が六席と長いカウンターがあった。そのほとんどが空席となる客の少なさが部屋の広さを誇張し、食器の音さえうるさく感じさせた。あたしたちは変な気まずさに身をよじることになったが、そんな気まずさも、いざ食事が始まってしまえばどこかへ行った。焼きすぎず、でも生すぎないほど良い焼き加減のローストビーフがとても美味しかった。

「私海外旅行初めてだから、食べ物合うか不安だったんだ。でもここのご飯とっても美味しい！」

折口さんは指に着いたフレンチフライの塩を舐めながら笑った。だから旅行じゃないってのと突っ込みながら、あたしはチーズの入ったブルパンを噛み千切る。チーズの塩気がパンの甘みと一緒に舌の上で踊る。

「そう言えばカナグちゃん、お金ってどうするの？」

「さっき質屋で、持ってきた金塊を換金してきた」

金は地域による価値の変動が少ないので、通貨がわからない所に行くときは大抵金塊を持っていく。簡単なライフハックを説明するあたしに、折口さんは目を輝かせていた。本当に日本の外に初めて出るのだなど、不思議な感慨を覚えた。

「他にはなんか無いの？ 知らない国の歩き方、みたいなの？」

「そんな大げさな物じゃないですよ……」

そう言いつつも、あたしは食堂を見渡して何かないか探してみた。すると折口さんの後ろで、難しい顔で新聞を凝視するおじさんにイザベルがコーヒーを出しているのが見えた。あたしはおじさんの一日読み古したヨレヨレの新聞を指さした。

「例えば、あの人が読んでる新聞。地方紙だったら特に、その土地の情勢を知るのに便利です。全文読めなくても、見出しだけで大まかなニュースがわかります。今のだと……」

あたしは目を凝らして新聞の見出しを見た。

「この町ではハットという市長の不正選挙……票買収疑惑が取り沙汰されているみたいですよ」

あたしは読み取ったニュースを折口さんに伝えた。しかし折口さんはピンと来てない顔をする。

「それで、明日から本格的に黒くじらの調査をするって感じで良いのかな？」

急に話題を切り替えるので、折口さんはどうやら本気で政治屋の汚職には興味がなかったみたいだ。自分で振っておいてなんだよとむっとしたが、あたしは脳内でシミュレーションした明日の行動内容を整理して話した。

「一先ずマルチセンサーでスキャンしてみましょう。写真も撮れるだけ撮って、あとは聞き込みとかですかね……」

電磁防護ケースに入れた機材までダメになってなければの話ですが、と最後に付け足して説明がひと段落すると、あたしはティーセットを乗せたカートを押してテーブルを

回るイザベルを見た。明日は、あの子を連れ歩くわけにはいかない。さて、どうやってイザベルを傷つけないようにあたしたちから遠ざけるか。考えているうちに、イザベルはあたしたちのテーブルに来た。コーヒーや紅茶の匂いがふわりと鼻をくすぐる。

「食後のお飲み物はいかがですか？」

少し大人びた所作と口調で、イザベルはあたしに尋ねた。

「今日イザベルが森で飲んでた紅茶って淹れられる？」

「もちろんです！ カナグさんは紅茶派なんですか？」

「いや、その日の気分による。今日はあなたが美味しそうなお茶を飲んでたから飲みたくなったの」

「あ、私も同じのが良い！」

横から口を挟む折口さんに会釈すると、イザベルはドライフルーツ入りの紅茶を二人分淹れ始めた。カップにお湯を注ぐイザベルに、あたしはある思いつきを話そうと思った。

「イザベル、明日はあたしたちの手伝いをしてくれないかな？」

「はい。私にできることならなんでもしますよ」

イザベルは茶葉を測る手を止めずに元気に返事をした。

「お土産用におススメの紅茶を買って来てくれない？」

「はい。では明日は一緒にお茶屋さんに……」

「いや、何を買って来てくれるのか、楽しみは後にとっておきたいの。あたしたちは別の所に行くけど、夕方には帰るから、その時見せてね」

カナグさんはサプライズを期待している。そう理解したイザベルの目がいたずらっ子みtainな使命感と好奇心の塊になる。

「わかりました！ 私に任せてください！」

案外簡単に別行動を受け入れてくれたイザベルは、何を買って驚かせようか考えているのか、るんるんで紅茶を二杯淹れた。

イザベルが他のテーブルに去った後、折口さんは獸耳をしょんぼり垂れてわかりやすく落ち込んでいた。余りにもうつむいている物だから、前髪が紅茶に浸かるんじゃないかと思うほどだ。こんなに落ち込むのは、イザベルが自分に懐いて一緒にいたがるだろうと思っていたからだろうか。あたしだってイザベルみたいな妹がいれば楽しいとは思う。でもそう思うならなおさら、イザベルにあたしの仕事に関わって欲しくない。

あたしは胸のモヤモヤを飲み込むように、熱い紅茶を飲む。モモの甘い香りとは裏腹に、紅茶は少し渋かった。

翌朝、あたしはフロントでイザベルのお父さんに部屋は掃除しなくて良いと伝えようとした。別にイザベル親子を怪しんでいる訳ではないが、職業病というヤツか、他人に自分が生活している痕跡を見られることに危機管理的な不安があった。

「行ってきます」

「おいイザベル！ どこに行くかくらい教えなさい！」

「お父さんには関係ないでしょ！」

フロントから、昨日とは別人じゃないかと思うほど激しい、イザベルの怒声が聞こえてきた。どうやら、お父さんとケンカしているようだ。まだ思春期って歳でもないのに、いっちょ前に反抗期かな。心配そうな折口さんとは逆に、あたしは微笑ましいとさえ思ってた。口元が緩んでいた。

「娘さんとケンカですか？」

「はい.....お恥ずかしい」

「いえぜんぜん。早く仲直りできることを祈ってますよ」

そう言ってから、自分に祈るべきカミサマがいない皮肉に気付く。あたしは気恥ずかしさをかき消すように早口でお父さんに要件を伝える。しかし、お父さんの返答は意外な物だった。

「お客様の宿泊されている部屋なんですが.....誰も泊まっていないはずなのですが？」

「はい？」

あたしは何度も宿帳を確認してくれるように言った。何かの間違いかもしれないとお父さんは宿帳を持ってきて、昨日サインしたページを見せてくれた。

そこに、あたしのサインは無かった。イザベルに懇切丁寧に説明されながら書いたサインが、ペン跡一つ残さず消えていた。

人間の記憶、特にあたしの結構いい加減だから、自分が忘れていただけかもしれない。あたしは改めて宿帳を書き直してから仕事に出かけた。車から下した携帯式センサーを折口さんに持たせ、黒くじらの周りを歩き回らせた。あたしはセンサーからタブレット端末に送られてくる情報を基に黒くじらのバイタルを分析し、それと並行して町の人々に黒くじらのことを噂も含めて詳しく教えてもらった。

「黒くじらってさ、実は悪魔らしいんだよ」

新聞屋の少年が、友人の好きな女の子をばらすみたいにニヤニヤと言った。こういうニヤニヤはやっぱり苦手だ。

「悪魔？ それってどういうこと？」

「ハット市長が就任する時に、悪魔と契約して市長の職を買収したんだってさ。不正選挙を悪魔に手伝わせたんだ」

「よくありそうなゴシップネタだね.....」

あたしは少年の顔からタブレットに視線を移す。黒くじらのバイタルをデータベースから検索した結果が表示される。確かに人間と契約して欲望からエネルギーを得るタイプの悪魔とよく似ている。タブレットを見ながら、悪魔も妖怪も全部数値化できてしまう夢の無い時代になったなと感慨に浸っていると、あたしは少年が熱い視線を投げてるのに気づいた。

「ねえ、教えてあげたお返しに一つ頼まれてくれない？」

「図々しいねキミ」

少年は手にした新聞の束をあたしに差し出した。

「あと二部で今日のノルマ達成なんだ！ 新聞買って！」

あたしは一瞬断ろうと思ったが、黒くじらの前で尻尾を振る折口さんが目に入り、夕

食の時の会話を思い出した。あたしは少年にコインを数枚渡して新聞を買い取った。黒くじらと町のことを知る情報源には、悪くない。

小さなパラボラアンテナを付けた物干し竿みたいなセンサーを担いで、少し疲れた様子の折口さんが帰ってきた。

「昨日言ってた、新聞からの情報収集ってヤツだね？」

ニヤつく折口さんは気に留めずに、あたしは新品の新聞を広げた。しかし、そこに印刷されている物と全く同じ見出しをどこかで見たことがあるような気がしてならない。新聞を読むにつれ、はっきりと像を為した違和感に鳥肌が立った。

夕食の時、イザベルがコーヒーを出していたおじさんが読んでいた新聞に載っていた、ハット市長の汚職を取り上げる見出しと記事が、あたしの買った新聞には刷られていた。あのヨレヨレ新聞も買った時はこんな感じだったと言わんばかりに、一字一句変わらない見出しがしわ一つない紙に張り付いていた。

「何これ……なんの冗談？」

折口さんもあたしの脇から新聞を見る。その金色の瞳が、徐々に緊張と疑問に輝きを強めていく。この町は何かおかしい。尻尾の灰色の毛が、ヤマアラシの針の様に固く逆立つのが見えた。

宿帳から消えたサイン。買ったばかりの新聞に書かれた昨日と同じ見出し。それらが示唆する信じられない仮説が、あたしの脳内でパチパチと音を立てながら組み立てられていく。

「旅のお方……」

注意して聞かなければ声と気づけないような、ほとんど音みたいな声をした。折口さんの獣耳がキッと立ち上がると同時に、あたしは周囲に神経をとがらせる。

「急に声をかけて、申し訳ございません」

カチカチと時計の歯車が噛み合うような異音を立てて、黒い人影があたしの前に現れた。それは、喪服のように真っ黒なドレスを着た、貴婦人の形をした人形だった。音のような不気味な声で話す度に、両脇に分割線の入った唇がパクパク動く。

「私は、ハット市長の公設秘書のチェシャーでございます。我が主が、あなた方とお話したいと申しております」

滑らかで白すぎる顔が笑顔の形に変形する。何か冷たい物が触れたように、首元の肌がぞわりと泡立った。

あたしたちはチェシャーに導かれて、黒くじらことサタルノタウン市庁舎に入った。市長が来るまで待つように言われた応接間の真ん中には、黒檀の箱を金のエングレービングで装飾した大きな香炉が鎮座し、頭が痛くなるほどのバニラの香が立っている。テーブルに二人分並んだコーヒーはコピルアクで、独特な甘い香りがバニラの香りと混ざって鼻腔に押し寄せた。香りのカオスに思わずえずきそうになる。

「お待たせしました。私、この町の市長をしております。ハットと言う者です。遠くから我がサタルノタウンにお越しいただきありがとうございます」

卵に手足が生えたような太った男が、丸い体をさらに丸めてお辞儀をした。あたしも

お辞儀を返すが、折口さんはこの部屋のカオスな香りにやられてそれすらできなかった。

「それで、市長はどうしてあたしたちをここへ？」

「おっと、さっそく本題に入りますか？　まずコーヒーをお召し上がりになってゆっくりされた方が良いのでは？」

「市長もお忙しいのに、お時間を取らせてはいけませんので」

嘘だ。早く、この不快な空間から出たかった。あたしの胸中を知ってか知らずか、ハットは口元に金色の差し歯を二、三本光らせてコーヒーの香りに満足そうな笑みを浮かべている。

「あなた方にお話しておきたいことがございまして、ここへ呼びました。私の仕事と、この町に関わることです」

これから自慢話をします、とハットの琥珀色の目が言っていた。あたしはハットから目を離さずにカップを持ち上げる。

「お気づきかもしれませんが、この町の時間は止まっています。正確に言うと、同じ十二月十七日を繰り返している、と言ったところですよ……」

信じられないのに、合点がいく、不思議な感覚だった。喉の渇きを覚えカップに口を付けたが、コーヒーは一滴も口に入っていない。

「驚いたでしょう。そしてこう思ったはずですよ。『何が、何故こんなことをしているのか？』と……」

ハットは自分のとっておきの宝物でも見せるかの様に、嬉しそうに執務机の引き出しを探った。ハットが取り出したのは、羊皮紙のような薄茶色の紙に書かれた書類だった。「これが、この市庁舎にもなっている悪魔、黒くじらとの契約書です。悪魔の契約書を見るのは初めてですか？」

契約書には、赤黒いインクで意味不明の言語が書かれており、最後に親指の形に黒々とした印が押されている。恐らく全て本物の血で書かれた物だろう。何の血かは想像しない方が良い。

「私が市長に就任した時、この町は大変な問題を抱えていました。特に、工場の排気による公害は酷かった。それら全てを、私の任期だけで解決できるはずがなかった……」

「それで……悪魔と契約を？」

あたしの問いに、ハットは静かにうなずいた。

「黒くじらは、この街の時間を一日で周回させることで、私に無限の時間を与えてくれました。同じ一日を繰り返し、およそ百年かけて、私と黒くじらは少しずつ町をキレイにしました。この町の空気の硫黄臭が消えるのには時間がかかります、それでもいずれは無くなる。私の悪魔との契約期間が終わるまで、まだまだ時間はたっぷりあるのですから」

ハットが丸い顔をミイラみたいにしわくちゃにして笑う。

昨日、あたしにどんなお土産を買って来ようか楽しそうに考えていたイザベルが、百年も昔に生きていた人間で、本来ならおばあちゃんを通り越して死んでいるかもしれない。冷たい現実が、体の奥から体温を奪っていくような気がした。呼吸が苦しくなる。

「なぜ、あたしたちにこんなことを話したんですか？」

何とか絞り出した質問を聞いて、ハットは静かに目を閉じた。

「この町に時折迷い込んだ旅人たちは、この町のタイムリープに気づくと、必ず私や黒く

じらを除いて、タイムリープを解こうとしました」

ハットは、甘ったるい湯気を上げるコーヒーカップを胸まで持ち上げた。盛り上がったぜい肉にカップを乗せるようにし、香を楽しむ。

「私たちがこの町をタイムリープさせているのは、簡単に言えば、人々の幸せな生活のためなんですよ……」

コーヒーを一口飲み、満足そうにハットは笑った。邪魔をするな。厚ぼったい脛がそう言っていた。

半日歩き回った疲れか、それともバニラの香にやられたのか、宿に帰ると折口さんはコートも脱がずにベッドに突っ伏した。西日が落ちる折口さんの背中にはピクリともせず、本当に眠ってしまったのかもしれない。もうすぐ夕食の時間だというのに、起こすのは面倒だと思いながら、あたしは八九式の弾倉から弾を抜いていった。弾の入れっ放しは動作不良の原因になる。

「ねえカナグちゃん」

枕に押し殺された声が聞こえた。よかった、起きてる、と安心する前に、ざらりとした違和感が鼓膜に張り付く。

「あの市長、なんとかやっつけられないかな？」

折口さんの声から、危険な臭いがした。弾丸を抜く手を止め、あたしは思わず聞き返した。

「だから、あの市長を、倒そうよ……」

枕から顔を上げた折口さんは、冷たく、でも熱くくすぶる何かを殺しながら言った。「市長が見せたあの契約書、あれは悪魔文字で書かれてた。私には読めたんだけど……」

悪魔文字は、独自の記号に魔力（量子エネルギーの一種と考えて良い）で意味を紐づけた文字で、悪魔と悪魔の契約者、妖怪のように鋭い靈感を持つ存在にしか読めない文字だ。オオカミの半妖の折口さんなら、苦も無く内容を理解できたのだろう。

「市長は、悪魔に票の買収を頼んだ上で、三百年間町の時間を止めるって契約をしていた……ズルして偉くなったんだよ。そんでもって、みんなを何百年も時間の止まった箱庭に閉じ込めようとしている……酷いよ……」

激怒の二文字が折口さんの額に深いしわを刻む。折口さんの中で燃えていた危険物が「正義」であることに気づく。あたしは折口さんの肩をさすり、冷静になれと口の中で唱える。

「今回の仕事は、クロノサウルスの調査だけです。これ以上この町に関わる道理はありませんよ」

あたしの仕事は済んだのだから、これ以上はあたしには関係ないし、関係しては、いけない。そんな権利も、あたしには無い。あたしの言葉を聞いた折口さんは、信じられない物を見るような目であたしの顔を見上げた。

「カナグちゃんはこの町を放っておいて良いと思ってるの？」

そうです。問題はない。わかっているのに、どうしてかイザベルの笑顔がちらつく。イザベルの幻想を振り払うように頭をかきながら、あたしはでき合いの理屈を口にした。

「町の人は何も知らない。普通に一日が終わって、朝になったらまた同じ一日が始まっても、町が住民ごとタイムリープしているんだから、たぶん誰も普通の暮らしを奪われたなんて思っていないですよ？　誰も困っていないのに、外から見ておかしいからって、勝手にそれを修正しようってんですか？」

「それじゃダメなの？　あの市長さえ殺せば、みんな普通に戻れるのに？」

純粋な善意でできた甘い声が神経を逆撫でする。あたしは苛立つ自分をなだめるように二の腕をさする。

「折口さん……その考えは危険です」

折口さんを何とか説得しろ。吠える理性が、ある昔話を思い起こさせた。昔と言っても、つい二年前にあたしが見た、そして世界の多くの人が良く知っているはずの話ではあるが。

「折口さん……イサメル王国の内戦の話、知ってる？」

あたしは、中央アフリカの小国イサメル王国の話折口さんに聞かせた。

イサメル王国では三つの氏族の対立が長年続いていた。強力な国王の独裁が氏族間の緊張と均衡を保っていたが、七年前に積極的平和主義者ケイ・ヤマトが独裁から人々を解放するために国王を暗殺したことで均衡が崩れ、皮肉にも内戦が始まった。この内戦に、有志連合軍の下請けで多数の民間軍事会社が派遣された。そこで、複数企業の傭兵たちがバルゼラルドという町を包囲、殲滅するという事件が起きた。殲滅戦に参加した傭兵のほとんどが、食糧支援に来た民間団体の警護に当たっていた。にもかかわらず、彼らは町を民兵組織が占領しているという情報を信じ、勝手に殲滅した。しかしその時には、既に民兵組織は町を移動し、アメリカの山岳師団によって壊滅させられていた。もぬけの殻となった町に、暴力だけが降り注いだ。

「たくさん、死にました。犠牲者のほとんどは民間人だった……男も女も老人も……」

イザベルみたいな子どもも、と言葉が続きそうになるのを、あたしはこらえた。骸骨のように痩せ細り、裸で土の上に転がる男の子の姿が蘇る。一瞬でもその光景がイザベルと重なったことが、気持ち悪くて、怖くて、吐きそうになる。

「停戦後、戦場ジャーナリストの護衛で現地に行き、地獄を見てきました。その地獄を作ったのが、正義感に任せて、仕事の領分を超えて力を使った傭兵たちです。殺人大好きな狂人じゃない。普通の正義感を持った、普通の人たちだったんですよ」

自分勝手な正義を振りかざすなら、それはただの暴力だ。そんなのヒーローなんかじゃない。破壊者だ。

折口さんは納得いかない様子で口をもごもごさせる。

「でも……」

「まだわからないんですか！　あたしたちの仕事はクロノサウルスの調査だけ。その契約者を殺せとは言われてないし、町の人をタイムリープから解放しろとも言われていない！」

叫んだ。抑えられなかった。ルールを超えた正義が起こした悲劇を知らないで、誰も頼んでないのにハットを断罪しようなどと言う折口が許せなかった。

「ハットを裁くのはこの町の警察、クロノサウルスを倒すのは国連軍の仕事です。正義だなんだって言って、自分の領分を超えて力を使うのは、とても危険な行為です……人が

死ぬことだってあるんですよ……」

夕焼けが赤く染める部屋に、長い沈黙が充満する。一瞬が一時間にも感じる、嫌な沈黙だ。

「カナグちゃんは……なんのために戦っているの？」

沈黙を引き裂いて、折口さんが口を開く。愚問だ。そんなの決まってる。生きるため、もっと端的に言えば……。

「金のためです」

正義よりルール、名誉より金。傭兵はそうあるべきだ。

折口さんの目は、あたしを見ているのに、見ていないかのように虚ろだった。ゆっくりと唇が動き、消えてしまいそうなかすれた声が漏れだす。

「汚い……」

はは。汚い、だってさ。そうか。素人にはルールを守って金のために戦う傭兵は汚く見えるのか。あの、女子供関係なくバルゼラルドの人々を殺したヤツ等よりもか！ きな臭い不快感が胃の中から這い上がってくる。あたしは折口さんから目を背け部屋を出て行こうとした。

「あ……」

ドアを開けると、部屋の前にイザベルが立っていた。その青い瞳に溜まった溢れんばかりの涙を見ると、心臓が壊れたんじゃないかと思うほど胸が痛む。

「イザベル……」

「あの……その……お土産……」

イザベルは一杯に膨らんだ紙袋をあたしに差し出した。その手は、凍えたように震えている。紙袋ごとイザベルの手を取ると、感電したように胸の痛みが全身に伝播する。

「紅茶……決められなくて……」

「何種類も買ってきてくれたの？」

イザベルがうなずくと、白い頬を涙が伝った。

「お話……聞いちゃいました……盗み聞きしちゃった」

「良いよ。大丈夫だよ」

あたしはイザベルの髪に触れようとした。この子を見捨てようとしたあたしに、そんな資格は無い。なのに、あたしの手は止まらなかった。

「イザベルに触るな！」

折口さんが吠える。オオカミの耳と尻尾の毛を逆立てた折口さんが、あたしからイザベルをひたたくり、自分の腕の中に小さな体を押し込んだ。

「イザベル……ごめんね……」

「謝らないでください……忍さんが謝ることなんて……ありませんから……」

イザベルが苦しそうに悶えても、折口さんは彼女を離そうとしない。イザベルが腕の隙間から何とか顔を出す。

町はタイムリープして、昨日あたしたちがチェックインした事実も忘れられている。それなのに、なぜイザベルは、あたしとの約束を覚えていたのか。言わずもがなだ。

「私、気づいてました……ずっと同じ十二月十七日を繰り返していること……いつも同じお客さんが、同じ新聞を読んでいるのも……お父さんお母さんとも、昨日ケンカし

ちゃったままで仲直りできないことも……全部」

街の人の中でイザベルだけがタイムリープを認識しているのか。イザベルと同じような人は他にもいるのか。そんなことを考える気にはなれなかった。どうせあとで調べるのだから、今はこの子の話を聞いてあげたい。

「十六日の夜に、お父さんとケンカしちゃって……お父さん大っ嫌いって口が滑っちゃって、そしたらお母さんともケンカみたいになっちゃって……どんなに謝っても、結局明日の朝には、また仲直りする前に戻ってて……ずっと……」

イザベルは折口さんの胸に顔を押し付けて泣いた。折口さんの腕と、毛に覆われた尻尾がイザベルを包み込んでいく。

「クリスマスまでには、仲直りしたかったのに……クリスマスが来ないんです……どうして……」

本来なら、来週にはクリスマスが来るんだ。クリスマスに特に思い出が無いあたしでも、子どもたちがどんなにその日を楽しみにしているかはわかっている。

「カナグさんは、お金のために戦っているんですよね？」

青い瞳の問いかけに、あたしは静かにうなずいた。すると、イザベルはぱっと折口さんの腕を振りほどき、部屋を飛び出した。一分も経たずに、陶器の子豚を抱えたイザベルが戻ってきた。

「お願いします！ この町を……みんなを助けてください！」

イザベルが腕を大きく振り上げ貯金箱を床に叩きつけようとした。あたしは反射的に手を出して貯金箱を受け止める。

つつつした陶器の子豚を抱いたまま、あたしは彼女の目線に合わせるようにしゃがむ。イザベルの澄んだ瞳が、ノコギリになってあたしの心をザクザク切りつけた。その痛みに、自分の中で何かが壊れていくのがわかった。

「あなたの気持ちはわかったけど、これは受け取れない……」

「どうして……」

イザベルはきょとんとしてあたしを見つめる。

「受け取る必要が無くなったんだよ」

冬になり極夜が続くと、トナカイの目は金から深い青に変色すると聞いたことがある。サンタクロースのトナカイも綺麗な青い目をしているのだろうか。イザベルの青い瞳に見つめられると、自然とそんなことを夢想してしまった。

「美味しい紅茶だけで、あたしは十分だよ」

あたしはイザベルの頭をくしゃくしゃやった。

夜明け前のクヌギの森は、息が凍るかと思うほどに寒い。それなのに、心が腫れたように痛みと熱を帯びて寒さを感じない。ボンネットに置いたランプの黄色い光が照らす中、あたしは武器の準備を淡々と進めていた。ボンネットに長い影を落とすのは、黒くて細長い形をした武器、八九式 5.56 ミリ小銃だ。あたしを強くしてくれる銃だ。あたしは一つ長い息を吐いた。

今日、あたしがやろうとしていることは正しいのかな？ 声を出さずに、八九式に問いかける。答えは返ってこない。カチカチと、手の中で金属が触れ合う音だけが響く。

イサメル王国の国王を暗殺したケイと、バルゼラルドを包囲殲滅した傭兵たち。彼らの動機は正義だった。その正義が、多くの人を傷つける戦乱を招いた。今のあたしも、安っぽい正義に突き動かされて、仕事の範疇を超えて力を使おうとしている。ハット市長を成敗し、クロノサウルスを殺してイザベルたちを解放する。詭弁や屁理屈を重ねても、あたしはケイや傭兵たちと同じことをしようとしている。それがどんな結果を招くか、わからないし、怖かった。

かちやりと、乾いた金属音がする。音のした方を見ると、折口さんがHK 45 拳銃のチェックをしていた。半妖といっても、殴る蹴るしかできないのは不安だからと一通り使い方を教えたのだ。折口さんは律儀にメモまで取って、そのメモを見ながら四十五口径の弾丸を慎重にマガジンに込めている。おっかなびっくり銃を準備するこの女が、あたしに安くて甘ったるい正義を語った。あんたのせいで、あたしは今から、傭兵が一番やってはいけないことをやろうとしている。金色の目を光らせてHK 45 を構える折口さんを睨むと、目の縁が熱くなった。

ジワリと歪んだ視界に、泣いているイザベルの顔がちらつく。この涙に、あたしは負けた。自分の意志を、覚悟を砕かれ、後先考えずこの子を助けようとしている。悔しくて情けなくて、あたしはイザベルの幻影から顔を背けた。視界の隅に、ボンネットの上の八九式が見えた。

一度戦うと決めたら迷うな。迷い躊躇うあなたに、私を使う資格は無い。聞こえるはずのない、鈍く黒光りする銃の音が、あたしの耳に冷たく吹きかかった。忘れていた寒さが蘇り、ぶると体が震えた。腹の底に熱が生まれる。

わかったよ八九式、あたしは戦う。今日だけは、イザベルのために力を振るいたい。手の中で光るライフル弾を見つめる。超音速で飛翔する金属の牙、5.56 ミリ完全被甲弾。^{フルメタルジャケット}これがあたしの方だ。その全てを、一人の女の子のためにあたしは使う。

この安っぽい正義を、いつか殺す。一発、また一発と鈍い金色の弾丸をマガジンに入れるたびに、胸の痛みは消えていった。

十二月二十六日

私の町に、いつもと違うクリスマスが来ました。雪がふらないどころか、とっても暑い日がしばらく続きました。わたしはクリスマスの朝を、初めて半そででむかえました。その日の昼すぎには、大勢の見たことないかっこうの兵隊さんたちが、お医者さんを連れて町にやって来ました。その人たちは、今は八月だって言うんです。変なの。

なんだか変なクリスマスだったけど、嬉しいニュースが一つあります。私が、お父さんとお母さんと仲直りしたことです。キリギリスの音が聞こえるふしぎなクリスマスマーケットで、ちょっとずつためたおこづかいでお父さんの好きなブルーマウンテンと、お母さんの好きなマンゴーの入ったアールグレイを買ってあげました。いつももらってばかりのプレゼントを、今年は私からプレゼントできたことが、とってもがうれしかった。

すてきなクリスマスをありがとう。

ひいちゃんとはな

ひいちゃんとはな

佐久間佳雪

昼寝から目覚めると、家には誰の気配もなかった。時刻は二時半。てことは父さんも母さんも泳ぎに行ったんだろう。去年から健康のためにプールに通い始めたらしいけど、もう二人とも成人したばかりの私よりよっぽど健康だ。

「おえ、」

自室を出てのろのろずるずると階段をおりる。体がめちゃくちゃ重い。あと頭も痛い。ついでに気持ち悪い。もう少し横になってりゃよかった。

昨日もなんだかんだ寝るのが遅かった。漠然とした不安のせいで上手く寝られなかったのだ。時計を見ていなかったから正確な時間は分からないけど、多分いつも通り二時は過ぎていた。我ながらこの不健康さには笑えてくる。いや、嘘ついた。全然笑えない。

階段を下りきって、リビングへ。でかいソファの上にとちょんと座る小花がいた。ああそうだ、昨日からうちに預けられていたんだっけ。大きくて丸っこい目が瞬きも忘れて熱心に外を見つめている。どうやら私に気づいていないみたいだ。こうなっているときは声をかけたって気づきやしないから、そっと部屋の端の方に座った。

体育座りをしたら膝に顔を埋める。あのまま寝っ転がっていたら心がポッキリ折れてしまいそうだったから起きてきた。でも、判断ミスだったかもしれない。起きてきたところで不安も辛いのも苦しいのもなくなならないし、だったら横になっていた方が具合はずっとマシだった。ああくそしんどい。もうなにも考えられない。クソが。

みぞおちのあたりを勝手にかき混ぜられているみたいな気持ちの悪さ。吐きそう、って訳ではない。でも、終わりの見えない辛さがある。ていうか理由が分からないのが一番きつい。むりだ。つらい。しぬ。ほんとクソ。

辛すぎてどンドン口が悪くなっていく。なんとか気を紛らわそうと顔を上げてみれば、小花が相変わらず外をじいっと見ていた。

小花は姉ちゃんによく似ている。親子なのだから当たり前っちゃ当たり前なのだけど、義兄さんの遺伝子がほとんど入ってないんじゃないかって思うくらい似ているから驚きだ。日に透けて金色に見える細い髪も、大福みたいにつるつと丸い頬も、小さい頃の姉ちゃんそのまま。目の色までそっくりで、少し色の薄い目は日に当たるとひまわりみたいな色になる。純日本人顔の私と違って、姉ちゃんは昔から顔立ちのはっきりした美人だった。小花も将来はきっと、お母さん似の美人になるはずだ。

——不意に、小花がこっちを向いた。本当に急なことでびっくりして固まる私と、百点満点笑顔の小花。

「ひいちゃん！」

小花のテンションがわっと上がり、立ち上が——ろうとしてびたっと動きを止めた。

「.....どした？」

「うごいちゃだめなの、びっくりしちゃう」

びっくりって、何が。小花の指が外を指す。その先にはブルーベリーの木の前にある、父さんが気まぐれに作ったガタガタの餌台。その上に、スズメがわんさかいた。二十、いや三十はいる。そいつらはちゅんちゅん大喧嘩しながら餌を食べていて、その必死さときたら可愛さの欠片もなかった。視界に入ったやつを片っ端から追い出したり、割り込んできたやつをつついて押しやったり、しまいには抜けた羽が舞うほどの激しい戦いまで起こる始末。スズメは意外と気性が荒いらしい。

「すずめ、いっぱいくるの。たまにね、しじゅーからもくるんだよ！ あとね、ひよどり、つぐみも！」

「よく知ってんね、私より詳しいじゃん」

「えへへ」

知らない名前が出てきたけど後で調べることにして聞き流す。なんだシジューカラって。四十から何があるんだ。

「あっ！ しじゅーから！」

「どれ？」

「あの子！ あの、くろいネクタイしてるの！」

「黒いネクタイ.....？ ああ、あれか」

小花が指さす、スズメの間を縫うように餌を探す白黒の小鳥。噂をすればなんとやら、あれがしじゅーから、らしい。スズメの圧に押され、というか普通に威嚇されて逃げていく。スズメ、凶暴だな。

しばらく窓の外を眺めていたら、くう、と腹が鳴る。小花だ。後追いで私の腹も鳴る。目を見合わせて、ふたり笑った。時計を見ると三時近い。小花にとってはおやつの日だった。

おやつを探してふたりでキッチンへ。何かしら用意されているだろうと冷蔵庫を開けてみれば、案の定ど真ん中に桃のゼリーが置かれていた。手に取ると蓋のところに付箋が貼ってある。なにに、「丸々一個は食べさせないこと」？

確かにこれ一個は子どもからするとかなり多い。分けて食べろ、ってことでいいんだろうか。

「あっ、もも！」

小花が声を上げる。ぴよこんと飛び上がって大興奮で私に抱きついてきた。桃が好きなのか。知らなかった。

「ひいちゃん！ はやく！」

「圧すげーな.....はいはい、ちょっと待ってね」

とりあえず興奮冷めやらぬ小花には食卓に座ってもらい、プラスチックの器にゼリーを半分くらい取り分けてやる。小花は子供用スプーンをぎゅっと握って準備万端だ。あ

んなに小さな手でもちゃんとスプーンが持てるんだなと変なところで感心する。

「はいどぞ」

「わあい！ いただきます！」

さっそく大きな桃を口に運ぶ小花。うわ、口ちっちゃ。食べ辛そう。これってやっぱり一口サイズに切ってあげるべきだったんだろうか。

「んへへ、おいしいねえ」

でも、小花は口いっぱい桃を詰め込んでにこにこ笑っている。これだけ幸せそうにしているしまあいいか。頬張りすぎてリズミたいになっているのが面白くて頬をつついてみたら、締まりのない顔で笑った。柔らかいほっぺだなあ。

「桃もう一個、いる？」

「いる！」

食わせすぎだって後で母さんに怒られそう。いやでもこの笑顔には勝てるまい。にこにこ機嫌で桃を食べる小花は文句なしの可愛さだ。

鳥見て、ゼリー食べて、たったそれだけのことであんなに重かった体が軽くなっている。謎の体調不良もすっかり解消されているものだから不思議だ。アニマルセラピー、いや、小花セラピーの効果は絶大だった。

「ありがとね」

「んえ？ なあに？」

「ふふ、分かんなくていいよ」

なんのこともよく分かっていない小花を撫で、桃をもう一切れ分けてあげる。大喜びしているのを見ながら、私はこっそり母さんへの言い訳を考えるのだった……。

おわり

トラベリング・サークル

トラベリング・サークル

大島治輔

さあさあ、寄ってらっしゃい見てらっしゃい
老若男女に紳士淑女、老いも若きもおいでませ
我らサーカス一座が皆さまを夢のパレードにご招待！

〇〇〇

ばあちゃん曰く、この村にこんな大々的なサーカス団が来るのは子供の時以来らしい。なにせこの田舎だ。見渡す限り続く草原に麦を植え家畜を放して生計を立てている。都会には所狭しと鉄の塔が立ち並び、道にコンクリートが敷き詰められているらしいが、そんなもの教科書の写真でしか見たことがない。それでもこの村には田舎なりに多くの人が住んでいる。余程の不作の年以外は食うに困ったことはない。きっとこの村から出ずとも一生を過ごすことはできる。貧しいといえば貧しいけど、豊かといえば豊かなのが僕の住む村だ。

「初演は日曜日の19時から！ そのあなた、きっと見に来てちょうだいね」

こてん、と微笑むようにウサギの仮面の女の子が僕に向かって首をかしげた。一輪車に逆立ちして手でペダルを漕ぎ、つま先で器用にチラシを配っている。僕は呆然とチラシを受け取った。女の子はその場でくるくると回った。ふらつく様子もなくキリッとポーズを決める彼女に、教会前の小さな広場が拍手で包まれた。見たこともない煌びやかな衣装、目の前で行われる不思議な曲芸。初めてだらけの存在だ。異邦人と称するのも生温い。僕は鼓動に急かされるまま家に走り帰った。チラシを握りしめて、サーカスが見たいと両親に訴えた。

ばあちゃんがサーカスの初演に連れて行ってくれた。いつもは欠伸を噛み殺すばかりの礼拝も、今日は人一倍熱心にやった。

開演一時間前。空は既に薄暗いのに、テントの周りには電球が吊るされてお祭りのように明るい。こういう夜はちょっぴり悪いことをしているような気になってワクワクする。

テントには既に人だかりができていた。見知った顔がたくさんいる。パン屋のご隠居にお向かいの頑固ジジイ。大工の棟梁はよく似た顔の老夫婦と一緒に。力自慢のマックスに、村一番の秀才セルゲイ、身体の弱いヴァーリャ姐さんまで。まだまだ小さい僕と背中曲がったばあちゃんは、人だかりに埋もれてしまわないように手を繋いで並んだ。「大人 20 ルーブル、子供 15 ルーブル」

チケット代はばあちゃんが支払ってくれた。小遣いを叩けば一人でも来られる金額だな、と僕は密かに思った。

受付のおじさんは髭面の眉間に気難しそうな皺を作っているが、僕の半分程度の身長しかなかった。よく見ると客席の誘導やテント裏でバタバタと忙しそうに走り回る人はみんな、受付の人と同じように小柄なおじさんだった。きっと彼らがサーカスの裏方なのだろう。

天幕の下のステージではピエロが音楽に合わせてパントマイムを演じていた。ピエロが虚空をペタペタと触り、見えない壁を押しては跳ね返される度に観客席から笑いが起こった。

「あ、時間だ」

客席の誰かがそう呟いた。ブツ、と音楽が消える。同時にピエロも動きを止めた。そうしてピエロはすっと立った。伸びた背筋はわざとらしいほどもったいぶって、右手の指を鳴らす。右半分照明が消えた。同じく左手の指を鳴らす。左半分照明が消えた。最後に恭しく礼をすると、ピエロの立つステージの照明も消え、天幕の中は真っ暗になった。隣の人の顔も見えない暗がりの中、大勢の拍手と指笛が鳴り響いた。

「楽しいねえ。ばあちゃん」

僕も負けじと手を叩いた。しかしばあちゃんは手を叩きながら馬鹿だね、と言った。「あれはクラウンじゃないか。ショーの前座みたいなモンさ。本番はここからだよ」

拍手が止まぬうちにブザーが鳴った。

ステージの中央にスポットライトが当たる。そこにはいつの間にか、黒いローブを身に纏った人が立っていた。遠目に見てもかなり細身で背が高い。コツ、コツと杖をつきながら前へと歩み、それをスポットライトがゆっくりと追う。ピエロのパフォーマンスで浮ついた観客は固唾を飲んで見つめている。

フードを落とす。その下には白く美しいたてがみを濡れた馬の顔が露わになった。「本日はお越しいただきありがとうございます。我ら旅のサーカス一座を温かく迎えていただいたこと、こうして無事に初演を迎えられたこと、この場を借りて御礼申し上げます」

どうやらこの人がサーカスの団長らしい。低く深みのある声は張ってもいないのに天幕中の空気を震わせる。誰もが数分前までケラケラと笑っていたことを忘れ、厳かな開演の挨拶に聞き入っていた。まるで語り部のおとぎ話のように、母親の子守歌のように。「それでは皆様、夢の一時をお楽しみください」

熱が、風が、輝きが目に飛び込んでくる。

巻き毛の貴族風の男が次々にイリュージョンを起こしていく。ステッキに花を咲かせ、

ハンカチを鳩に変えて飛ばせてみせた。

タキシードを着た二足歩行の虎が、ライオンや像を先導してフラフープを回させたり、炎の輪を潜らせたりした。

布の多い服のおじさんが変わった形のマンドリンをかき鳴らして蛇と踊った。

空中ブランコでキャッチに失敗した時には悲鳴が起きたが、背中に生えた羽でパタパタと飛んで何食わぬ顔で演技を続け、安堵の歓声と笑いが客席を包んだ。

僕にチラシをくれたあの女の子は綱渡りを披露していた。一本の細いロープの上で華麗に宙返りをしてみせる彼女は、まさしくウサギのようだった。

代わる代わる展開するステージショーに。テント中がキャストのパフォーマンスに歓声を上げ、手に汗握り、惜しめない拍手を送る。僕も身を乗り出して声援を送った。その声援にまた魔法のようなきらめきが返ってくる。笑顔が、興奮が、天幕中にどんどん膨れ上がる。

ああ、きっと僕はこれに会うために生まれて来たんだ。星が落ちるように、海が割れるように、今日この瞬間に僕は運命というものを目の当たりにしたんだと、本気で思った。「ばあちゃん、僕サーカス団の人になる」

帰り道、カシオペア座を見上げながら僕は言った。ばあちゃんはお前にできるわけないだろ、とカラカラ笑った。

その日から僕は暇さえあればサーカスのテントに通った。

「サーカス団に入れてください！」

「おやおや。開演にはネエ、まだ時間がありますぞ」

初日は変なマンドリンをベベンと鳴らしながら、おじさんにくすくすと笑われた。

「サーカスの人になりたいんです！」

「それじゃあ、気を付けてお家に帰るのですよ」

またある日はピエロに風船で作った人形を持って帰された。

「僕も一緒に連れて行ってください！」

「てやんでい！ それを決めるのは俺たちじゃねえ。団長殿だ、このガキンチョが！」

受付のおじさんに怒鳴られた日もあった。

「団長さんに会わせてください！」

「……………」

羽のついた女の子たちからは目も合わせずに逃げられた。

「下働きでも、何でもやります！」

「そうかそうか！　ところで少年、昔ブラウンシュヴァイク公という王様に仕える男がロシアに従軍したことがあってね……」

巻き毛のおじさんとはいつの間にか違う話をしていた。

「入れてくれるまでここから動きませんから！」

「邪魔をするんじゃない」

実力行使に出ても、虎の紳士にあっさりつつまみ出された。

と、こんな風に連日連敗の僕は焦っていた。チラシによれば今日が最後の公演だ。諦めたくない。でもどうにもならないかもしれない。そう考えるとツンと鼻先が痛くなった。

だからいつものように、いや最後かもしれないと思っていつもより早めにサーカスのテントに向かったはずだった。サーカス団は教会や学校の倍くらい向こう側にテントを構えている。僕の家からはちょっと遠い。十年そこそこ慣れ親しんだ生まれ故郷とはいえ、そこはあまり足を延ばしたことの無い場所でもあった。それでもここ一週間通い詰めて、今更迷子になんてなるはずなのに。

「……あれ」

気付いたらテントを見失っていた。代わりに見つけたのは大きな船。僕の村は四方八方、山も海もない草原だから、湖のボートより大きな船を見るのは初めてだ。絵本で見た海賊船にどことなく似ている。リンゴ農家に婿入りした伯父さんが運転するトラックよりも、もしかしたら僕の住む家より大きいかもしれない。いやでもこんなところに船があるのはおかしい。車輪のようなものも見つけたし、そういうデザインの車なのかもしれない。でも帆のあたりにプロペラのようなものもある。生憎僕は乗り物に詳しくないから、これが船なのか、そもそも乗り物なのかすら見当がつかなかった。

しかしそれ以上に不思議なのが、こんな大きくてヘンテコなものを誰も知らなかったことだ。この見晴らしのよさで、噂話の大好きな住民の口の端にも上らないなんて。

「私たちの船に何かご用？」

不思議に思って船を見上げていると、突然後ろから声を掛けられた。驚いて振り向くと、そこには煌びやかなステージ衣装に顔を覆うウサギの仮面。

「あら、あなたはいつもの。また来たのね」

連日サーカスに入れろと通っているせいか、すっかり顔を覚えられてしまった。ちょっとびり気恥ずかしい。彼女はこてん、と首を傾げた。これが彼女の微笑むときの癖なのだろう。

「こんなのあったっけ、と思って」

「……そう、迷い込んでしまったのね。テントはあっちよ」

そう言って彼女が指さす方向には、確かにそう遠くない距離に、見失いようもない派手なテントが見えた。

「今日は千秋楽だから、いつもよりさらに特別なステージを見せてあげるわ。楽しみにしていてね」

「あ、あの！」

テントの方へ優しく背中を押す手を振り払うように、僕は振り返り彼女の手を掴んだ。きっとこれが最後のチャンスだ。

「僕、本当に、本当にサーカス団に入りたいんです！ でも誰も取り合ってくれなくて、団長さんに会いたくても、団長さんいつ行ってもいなくて」

「ちょっと待って。ねえ、落ち着いて。あなたのご両親は何ておっしゃっているの？」

「パーパもマーマも本気になんてしてくれない！ 僕が子供だからって、全然真面目に取り合ってくれないんだ！ お願いします、団長さんに会わせてください！ 僕をあなたたちの仲間に入れてください！」

祈るように、叫ぶように思いの丈をぶちまけた。兎にも角にも、誰にも取り合っても

らえないまま、なあなあに終わってしまうのは嫌だった。例え望みがないとしても、せめて誰かに僕の本気を受け止めてほしかった。

女の子は呆気にとられていた。手を握られ、こんなことを訴えられ、彼女にとってはいい迷惑だろう。それでも彼女は僕の手を握り返すと、こう聞いた。

「あなたは どうしてサーカスに入りたいの？」

「あなたたちに心を奪われたから」

彼女の問いに、僕は迷わず答えた。途端に振りほどかれそうになった手に慌てて力を籠め、言葉を続けた。

「ふざけてなんかいいよ。でも何をしたらって、寝ても覚めてもご飯を食べても、僕はサーカスのことばかり考えているんだ。だってあんなの、世界に二つとないよ。ショーで観客が笑顔になって、歓声であなたたちはどんどん輝いていく。そうしていっぱい幸せが膨れていくんだ。僕はあのテントの中に神の国を見た。本当だよ。信じて」

お願い。君まで僕の本気を笑わないで。

「.....それ、もう一度同じことが言えて？」

突風が二人の間を吹き抜ける。ふらついてたたらを踏んだ僕は、彼女の繋がれていない方の手がいつの間にかウサギの仮面を持っていたことに気付いた。

もう一陣。吹き抜けた風に、視界が亜麻色に染まる。

「顔を上げて。私を真っ直ぐに見て。そうして同じ台詞を言ってみせて」

編み込んですっきりと纏められていた彼女の髪が千々に風にあおられている。女の子といえども僕より少し背が高い。僅かに見上げると、亜麻色の長い髪に縁取られた顔が露わになった。

丸く白い顔には、眉も、目の窪みも、瞳の水晶も、口の空洞も耳もついていない。鼻の隆起の他は何もない、のっぺりと平らな顔面がそこにあった。

「何度だって言うよ。僕はあなたたちに心を奪われた。だから僕をサーカス団に入れてください」

もう一度、彼女の顔を見つめてハッキリと言った。彼女がどんな思いで何を考えているかは分からない。でも僕は、ただ伝えたいと念じて顔を上げ続けた。

そのまま僕たちはしばらく見つめ合っていた。

「ふ、ふふ、あはははは」

沈黙を破ったのは彼女の方だった。背中を震わせ、鈴の転がるような声で笑った。やっぱり彼女も僕を笑うのか、と思うと酷く惨めな気持ちになった。

「ごめんなさいね。決してあなたを馬鹿にしたわけじゃないのよ。むしろ.....ふふふ。私、ヘレンっていうの。よろしくね」

「え、あ、うん。よろしく。僕の名前は」

言おうとした口を、ヘレンは人差し指で制した。そうして息をひそめて言った。

「それはまた今度、ね？ 今は、いいことを教えてあげる」

千秋楽は確かに特別だった。ピエロがずっと失敗していた玉乗りを華麗に成功させ、弦楽器で踊る蛇は全て真っ白になり、ヘレンは綱の上で本物のナイフを使ったジャグリングを披露した。何より驚いたのは人体切断マジックに団長も参加したことだ。あの細長い体が分離した時、悲鳴と歓声が響き合って客席は過去最高潮の盛り上がりを見せた。

フィナーレには受付や裏方の小さなおじさんたちまで、全員舞台に出てきて共に歌い踊った。客席上空を飛び天使の如く花を降らせる女の子たちに、最後まで最高を上回る興奮と、これが本当の最後なのかと寂しさで胸が熱くなった。

「.....これにて全公演を終了いたしました。本日もご覧いただき、誠にありがとうございました」

ショーの終わりを告げる団長の声は、今日も深い湖のように静かだ。そして最後はいつもの言葉で締めくくる。

「それでは皆様、どうか良い夢を」

家に帰ると、いつものようにパーパとマーマが出迎えた。ばあちゃんは友達のお誕生日パーティーに誘われたらしい。明日の朝まで帰ってこないとの事だ。夕飯を食べる間も僕はずっと無口だった。サーカスが終わってしまうから拗ねているのだろうとパーパは僕を揶揄ったけど、それも無視した。今の僕はそんなことにいちいち反応するほどの余裕はない。

両親が寝静まるのを待って、僕は行動に出た。リュックの中に水筒、オートミールの缶詰、懐中電灯、お気に入りの帽子と、必要なそうものを詰め込む。

『私たちは旅のサーカス団。千秋楽が終わったらすぐに次の街に向かうわ。この船が動き出すのは真夜中の日付が変わる頃。朝にはもうすっかり遠くに行っているでしょうね』

リュックを背負う。重い。この重さを背負ってもう一度あの距離を歩くなんて、普通ならうんざりしてしまうことだろう。

『船の入り口はハンドルを回して開けるのだけど、これがちょっと特殊なの。だから人のいないところでって、きつく言われているのだけど.....ここには誰もいないもの。ねえ?』

そう言ってヘレナはゆっくりとハンドルを回したのだった。右に一回転、左に二回転、半分右に回して押し込んで。その一つ一つの工程を殊更丁寧に、わざわざ言葉に出して。僕が一度見ただけでも手順を覚えられるように。

外の空気は思いのほか寒かった。慌てて上着を着こむ。リュックを床に下ろした音が大きくて、気付かれるのではないかとドキドキした。

「(本当に行くの?)」

自分自身に問いかける。生まれてこの方村から出たこともないのに、みんなに黙って家を、村を飛び出して。書き置きは残してきた。それでもパーパもマーマも、ばあちゃんも友達も、きっとみんな僕を心配して探し回るだろう。

『もう時間ね。それじゃあ、君が本当に本気なら.....またね』

でも、ここで立ち止まることもまた、できない。

あの舞台に憧れた。あの夢の場所にいたかった。その思いを受け止めてくれたのはヘレンだけだった。ここにいたら、きっと僕は燻ったまま灰になってしまう。

「ごめんね。きっといつか、帰ってくるからね」

誰に聞かせるでもなく呟く。その言葉があまりに言い訳じみて余計に切なくなった。

名残惜しさを振り切るように、重たいリュックを背負い直して僕は走り出した。満天の夜空を切り裂くように、流星が一筋、零れ落ちた。

「大変だ！ 見知らぬガキが忍び込んでやがる！」

船の乗りこみには成功した。ごうごう、ゆらゆら、揺り動かされる不思議な感覚に眠気を覚え、リュックを枕にちょっとひと眠りしている間に僕は見つかったらしい。

あれよあれよと小さなおじさんたちに担ぎ込まれ、大きな部屋の中央、集まった団員たちの前に突き出された。目の前にはサーカス団の人たちが、サーカスに出ていた姿のまま僕を見下ろしていた。小さなおじさんたちが騒ぎながら僕を床に放り投げるのを、虎の紳士は腕組みをして、羽の生えた女の子たちはひそひそと固まって、ピエロは派手に仰け反って、それぞれの反応を見せていた。その中にヘレンはいなかった。

「泥棒だ！ 空き巣だ！ 侵入者だ！ 摘まみ出せ！」

「とはいえ、もう船は動き出してしまいましたよ」

「ンなことよか、何も盗られてねえだろうな？」

「こんな小さな子供が忍び込むとは……」

「どうする。今更戻る、できない」

がやがや、がやがや、がやがや。異形の団員たち言い合う。

どうしよう。焦りに冷や汗がわいてくる。急速に体温が下がっていくのが感じ取れてしまう。

「(僕は泥棒じゃない。サーカス団に入りたくてついて来たの。お騒がせしてごめんなさい。どうか僕をサーカスに入れてください)」

きちんと言わなければ。だというのに、喉が張り付いて声が出ない。いや違う。届かないのだ。彼ら彼女らはまるで僕を見ない。サーカスに入りたくて来たのにこのままじゃ泥棒扱いだ。恐ろしい、という気持ちが今になってふつふつと沸き上がってきた。

その時。ベベン、と弦音が空気を揺らした。それまで争うように言い合っていた団員たちがピタッと止まる。

「マアマア皆々様、落ち着きなされ」

年老いた男性の声だ。そこには頭からつま先までゆったりとした服で全ての肌を覆い隠した人が、端っこで悠々とみんなの視線を受けている。床に膝を立てて座り、隙間から奇妙な文字がびっしりと書かれた脛がちらりと見えた。

その人は僕の方に頭を向けると、頭巾から垂れ下がった布で顔も見えないけど、何となく微笑んでくれた気がした。

「僕や。泥棒かい？」

「違う！」

反射的に叫ぶ。ようやくまともな声が出た。彼はうんうんと頷きながら、口を挟もうとする小さなおじさんたちを制して、僕に続けて問う。

「じゃあ、どうして？」

「僕はサーカス団に入りたい！　あなたたちの仲間に入れてください！」

僕はそのまま真っ直ぐとマンドリンの人を見て、叫ぶように言い切った。不安や恐怖は依然胸に巣食っているけれど、ここで言わんでどうすると、必死で勇気を振り絞って顔を上げた。

部屋中がシンと静まり返る。握りしめた拳は手汗でビショビショだ。やがてああ、と巻き毛の男が手を打った。

「よく見たらこの少年、連日公演に来てはサーカス団に入りたいと言っていた子じゃあないかい？」

彼の言葉に、そういえば、と何人かが納得したらしい。やっぱり気恥ずかしくもあるが、これで僕の本気が伝わってくれと、ただただ祈るように前を向き続けた。

ベン、と弦を鳴らす。リズムも調子もない、間延びしたような音の繋がりがいやに緊迫して聞こえる。男は大きな撥でかき鳴らしながら歌うように言った。

「僕や。サーカスに入りたいのかい？」

「はい！」

「そうかい。ナア皆々様。こういうことは、よく、とは言いませんが、マア稀に、極々稀にあることじゃあ、ありませんか。だからそう、目くじら立ててやりなさるな。全ては団長がお決めになるのですから」

「ホーイチおじ様の言う通りですわ。皆さま」

ホーイチ、と呼ばれた男の言葉に鈴のような声が続く。ギィ、と扉を開けた先には、亜麻色の髪とウサギの仮面。

「ヘレン。緊急事態、なのに、どこ行っていた？」

「ごめんなさい。でも私はこの場で最も必要なことをしていたつもりですわ。……団長さん、あとをお願いします」

そう言ってヘレンは、今度は大きく扉を開けた。その向こうには首を反らせるほど高い背にミルクのように白いたてがみ。コツ、コツと杖をつくたび、その場にいる全員が瞬時に姿勢を正し、かの人のために道を開けた。

「仔細はヘレンから聞いた」

低く深く、男女の差も分からないような団長の声を、僕はほとんど真下から聞いていた。放り出され床に尻を付いたまま、僕は緊張ともどこか違う心持ちで、団長の美しい産毛と宇宙を閉じ込めたような瞳に見入っていた。

「この子供は我々が保護する。いずれまた、かの故郷を訪れる時まで、一座の滞在を許す。以上だ」

団長はそう言うと、踵を返して部屋から出ていった。一拍遅れて、部屋に騒がしさが戻ってくる。ヘレンから差し出された手を、僕は何が何だか分からぬまま取った。

「良かったわね。団長さん、あなたがここにいることを許して下さったわ」

「……じゃあ！」

「サーカス団員に、とは言ってねえがな！　てめえなんざ雑用係で十分だ！　全く騒がせやがって」

立ったそばからゲシゲシ小さなおじさんに蹴られた。それを団員たちが見て笑った。

今はムツとするより、ほっとする気持ちの方が強かった。

〇〇〇

「ほら、ここが個室よ。左から順にピエロのゲイシーおじ様、琵琶弾きのホイイチおじ様……あ、琵琶っていうのはあのリュートみたいな楽器のこと。そのお隣のミスター・マンチョーゼンは手品師なの。ル・フェイ姉妹とレプラコーン隊は大部屋だから後で案内するとして、ああ、あと虎のリーディおじ様はまた別に自室を持っていらっしゃるって……」

「待ってヘレン。そんなにたくさん、急に覚えられないよ」

ひとまず滞在を認められた僕は、ヘレンに手を引かれながら船の中を案内されていた。後ろから、せっかくだからと付いてきたゲイシーが笑顔で——もっとも、ピエロの顔は笑顔にも泣き顔にも見えて、かなり表情が読み取り難い——僕らについてきている。

「ご機嫌ですね、ヘレン。後輩ができたのが余程嬉しかったとお見受けします」

「……ゲイシーはどうして顔、そのままなの？」

「何か不都合がおありですか？」

何気なく聞いたことを、心底不思議そうに聞き返された。そう言われるとそれもそうだな、と僕は納得した。

一座の雑務全般を担当するレプラコーン隊のおじさんから、掃除をするように言い渡された。とはいえ僕が入れる部屋は談話室をはじめそう多くないし、そんなに汚れているようにも見えない。そう言って尻を蹴られて以来、大人しく仕事をするようにしている。

談話室にはミスター・マンチョーゼンが昔の肖像画でよく見るような白髪のを巻き毛を櫛で整えていた。彼はとってお喋りさんだ。僕は彼の法螺話に耳を傾けながら床を磨いた。

「ところでミスター。サーカスの巡業地って団長さんが決めるんだっけ」

「そうだともし、いや正確には違うな。団長にしか行き先が分からないのさ」

「同じことじゃないの？」

「いいや、全く違うさ。団長は雨が降る場所を察知できるだけで、雨を降らせることができるわけではないのだから」

「……団長さん、雨乞いするの？」

「ハッハッハ！ 少年、国語の勉強は苦手かね？」

ミスターは大口を開けて豪快に笑う。よく見ると彼の舌は二枚に割れていた。だからあんなに喋ってられるんだな、と変に感心したのを覚えている。

「あの、団長さんって何者なん……ですか？」

ぼっかり時間が空いたある日のこと。日頃疑問に思っていたことを、僕は思い切って聞いてみた。

「何者、と言われましてもナア。団長は団長、としか」

談話室でリーディとゲイシーのブラックジャックをぼんやりと観戦していたホーイチが、困ったように答えてくれた。

「最初の日以来、団長さんだけは全然顔を見てないから。人嫌いだとしても、ル・フェイ姉妹ですら一応毎日すれ違うのに。……見分けはまだ、つかないけど」

「ご安心なさい。あの七姉妹の区別は誰もつきませんから」

ゲイシー曰く、あの姉妹は区別されることを良しとしないらしい。同じ顔と羽の女の子が複数人いるとは思っていたが、七人姉妹なのはこの日初めて知った。

それはともかく団長だ。ヘレンに案内され、レプラコーン隊に言いつけられた雑用をこなして、団員にも船の構造にもだいぶ慣れてきたが、団長の部屋はだけ未だに見たことがない。

「団長は、そうだな。この船の先導人、我らを拾い率いる存在、一座の絶対的権力者。だからこそ我々は団長について行く。これで答えになるか」

リーディはしましまの毛並みに鋭い爪を持つ右手(右前足?)で顎をさすりながら言う。グルルル、と喉がなった。この人は真面目でいい人だけど、身体が大きくて威圧感があるからちょっぴり怖い。他の人みたく気軽に話すのにはまだ勇気がいる。

「団長がサーカスのみんなを集めたの？」

「団長がと言いますか、マア、大体は先代、先々代……アア、ヘレンは今の団長が連れてきた子でしたナア。懐かしいことで」

「それでも今の団長は、随分と私たち一座の団員に関わってくださる方ですよ」

「先代は行き先を告げるだけで、あとは瞑想と説法ばかりしていたからな」

こうして僕は、団長が代替わりすることと、ヘレンが新顔の類に入ることを知った。結局団長のことはよく分からなかったけど、ヘレンが何かと僕を気にかける理由は思いがけず知ってしまった。

巡業地にて。テントの設営は僕も駆り出された。かなりの力仕事だった。レプラコーン隊からは「ノミよかマシな働き」と言われた。多分あまり役に立たなかった、という意味だと思う。町に降り立って一日はテントの設営で潰れた。その日の夜、僕は倒れるように眠った。

次の日。少し寝坊して起きてくると、団員はみんな出払っていた。代わりに珍しく団長が談話室にいた。あまりの衝撃に、眠気が一気に吹っ飛んだ。

「これから我らは、十日間この町に滞在する」

「は、はい。あ、そういえば今日から呼び込みですよ！ 僕もチラシ配り、手伝います！」

「町の人間に会ったら、坊。お前をこの町に置いていく。船から降りたくば好きにしろ」

団長は僕にそれだけ言うと、杖をついて去ってしまった。

次も、その次も、それまた次も、僕は巡業中に船から出ることを許されなかった。船に窓はないから外の様子は分からないし、テントの設営と撤去の時は忙しすぎて外の空気を吸うどころじゃない。甲板は危険だから原則立ち入り禁止。何より船から出られないということは、大好きなサーカスも見られないということだ。巡業地に滞在する間、船内を掃除したり、小道具を磨いたり、その日に売れたチケットを数えたりしながら、僕はずっとヤキモキしていた。あの憧れた夢の舞台が見られない。こんなに近くにいるのに。何のために僕はここにいるのだろう。

バレなきやいいのだと、搭乗口に手を伸ばしかけたのも一度や二度じゃない。その度に思い出すのは団長の輝くたてがみと吸い込まれそうな瞳。いくらこっそりやっても、団長には全てがお見通しな気がした。何度も悩み、魔が差し、少しぐらいならと思っても、結局抜け出すことは出来なかった。

このことをぼやいて以来、団員が船内で出来る範囲のパフォーマンスを見せてくれるようになった。ヘレンは椅子を組み立てた上で軽やかに踊り、ミスター・マンチオーゼンは新しい手品が思いつく度に披露してくれて、レプラコーン隊は僕を罵倒しながらも差し入れのお菓子を分けてくれた。そのどれもきらきらとしていて、やっぱり僕はまだこの船から降りたくないと、団長の言いつけを良い子に守り続けた。

〇〇〇

しかし、そんな日々も間もなく終わる。団員全員が談話室に集められた。そして団長から通達が下る。

「次の巡業でお前の故郷の付近に寄る。そこでお前を降ろす」

一座で団長の決定は絶対だ。ついにこの夢の船を降りる時が来たのか。じんわりと切ない思いが胸に沁みる。もっと駄々をこねるかと思ったが、存外僕は旅の終わりを冷静に受け止めていた。理由は何となく分かっている。

「うう、あなたがいないと寂しくなるわ」

「ありがとうヘレン。でも僕、諦めないから。きっとまたいつか会えるよ」

仮面の下ののっぺらぼうがきゅう、と悲しげに歪んでいた。目や口がなくとも、彼女の表情は雄弁だ。僕はヘレンとしっかり抱擁を交わした。

あの時船を見つけた場所に僕は降ろされた。村はずれの空き地は相変わらずガラガラだ。大きく息を吸い込むと、生きた草木と土の匂いがして嬉しくなった。

こうして僕は久しぶりに、懐かしの故郷へと足を踏み入れた。

はずなのに、何だこれは。

歩けば歩くほど僕は困惑した。道や風景に見覚えはある。そもそも田舎の村だから家や人より木と草と動物の方が目立つくらいだ。そこは確かに変わらない。それでも僕の故郷は美しい草原と麦畑の村だった。でもこれはどうだ。あんなに広く実っていた畑が

枯れている。家々の壁板が剥がれ、壊れかけたまま放置されている。何より道行く人に活気がない。

「あの、すみません」

近くにいた、暇そうな男に話しかける。髪はぼさぼさ、汚いシャツに骨の浮いた身体は垢が浮いていて、思わず顔を顰める。そして彼の右手に『求職中』の看板を見つけ、目を疑う。この村の住民はだいたい農家だから、動ける男手はむしろ引っ張りだこののに。「……悪くねえ身なりのガキだな。とっとと家に帰りな。こちとら三日はロクなモン食ってねえんだよ」

僕はリュックからオートミールの缶詰を取り出した。男は缶詰をひったくると、無心で食べ始めた。僕はその隣に腰を下ろし、男に聞いた。

「……この村は、もっと豊かな村でしたよね」

「昔は、な。二十年くらい前に疫病と飢饉が重なって以来、ずっとこんな状態だ。たくさん人が死んだ。ヴァーリャみたいな身体の弱い奴はともかく、パン屋の大旦那にワイン蔵の頑固爺、死にそうもねえ年寄りが死んで、有望な若者も死んで……棟梁もセルゲイもアダムも……ああ悪い。知らん奴ばっかだよな。俺もそのうち死ぬ。何となく分かんだよ。自分のことだから。……そら、ごっそさん」

最後に男の名前を聞いた。この惨めで、ガリガリで、今にも死にそうな男は、マックスと名乗った。

二十年前。マックスは二十年前と言った。僕がこの村にいた頃は不作や流行り病とは無縁だった。だから疫病や飢饉は僕がサーカス団の船に乗り込んでから起きたはず。しかし僕が船に乗っていた期間はそう長くない。大雑把に一年、どう多く見積もっても二年は超えていない。現にそれまで僕は年々身長が伸びて、前の年の服は小さくて着られなくなっていた。けれども今、僕は家から飛び出したときの服をピッタリなまま着ている。

何とか実家までたどり着いた。田畑や家々が荒れても、道までは変わっていないのが幸いだった。やっぱり僕の家も寂れていた。板張りが更に張りぼてで、擦れて文字の読めなくなった表札にスプレーで『気違いの家』と書かれていた。

嫌な胸騒ぎが止まらない。コンコン、ノックする。反応はない。ためしに扉に手を掛けると、あっさりと開いた。

「ただいま」

一応声をかける。中は酷い状態だった。家具が散乱した上にうっすら埃が被っている。椅子も机もキッチンも、何なら床に散らばる食器の破片も見覚えのあるものばかりなのに、それらがズタズタに乱れたまま長らく放置されていることに違和感しかない。タンスの上に卓上カレンダーを見つける。これは見たことがない。手に取ってみると、僕が最後に見た西暦より十八年も進んでいた。

そこら中に散らばるガラスの破片を踏まないように家の中を進む。僕の部屋は板をバツェンに打ち付けて封鎖されていた。

両親の寝室には片方のベッドだけ盛り上がっていた。そこにはしわくちやの老婆が横

になっていた。

「ばあちゃん！」

僕は叫んだ。やっと家族に会えた。その安堵感に腰が抜けそうなほど嬉しかった。ばあちゃんは僕に気付かず、モゴモゴと口を動かしている。何かを言っているようだ。僕はばあちゃんの口元に耳を近づけた。

「ア、アア……アダム、アダムや。サーカスに行っちゃいけないよ。サーカスがお前を攫ってしまうからね……返せ。可愛いアダム。サーカスが、人攫い。返せ。ア、アダム……」

怖気がした。別の意味で腰が抜けた。おぞましさに背筋が震わせたまま、転がるように家から出ていった。

震えも冷や汗も止まらず肩で息をしていると、通りかかったおばさんがどうしたの、と声をかけてきた。マックスと比べるとまだ身なりも体つきも健康そうなおばさんが、僕の背中を優しく撫でてくれた。

「あその家に何か用があったの？ 駄目よ。あそのおばあさん、昔息子さんが急に失踪したらしくて、それからずっと気が狂ってしまったの。他の家族もみんな死んじゃって、あれで生きているのが不思議なくらいよ。空き巣でも探索でもいいけど、別のところにした方がいいわよ」

息子が失踪。それじゃあ、あの人は。

「……サーカスが、ありましたよね」

突然の言葉に、おばさんは不可解な顔をした。わからない。わからない。そう思い続けるのも、もう限界だった。

「この村にサーカス団が来ましたよね。一年か二年くらい前に。ばあちゃんが子供の時以来って言ってました。その時はまだ、全然こんな風じゃなかったですよ？」

僕はおばさんのエプロンに縋って叫んだ。わからない。わからない。わからない。どうしてこんな風になってしまったのか。

「みんな、みんな楽しんでたよね？ ピエロがいて、ミスターのマジックを見て、ライオンとか操ってるのが虎で！ あとは羽の生えた女の子の空中ブランコと、ほら、白い馬の団長さんの！ みんな笑ってたよね、夢みたいだったよね。その時はこんな状態じゃなかったはずなのに！」

誰か教えてくれ。この村は、僕は、何が起きているの。僕のあの日々は、僕の夢の舞台は何だったの。どうしてこんなことになってしまっているの。

僕は、僕の日々は、夢は、記憶は間違っていないよね？

「……何を、言っているの」

希望が打ち砕かれる音がした。

「この村にサーカスが来たのは二十年も前のことよ？ それに虎とか、羽の生えた女の子とか.....現実にそんなのいるわけじゃないじゃない。ぼく、そういう絵本でも見たの？」

嘘。嫌。違う。どれも言いたいのにどれも出て来ない。呼吸も忘れて固まった僕を尻目に、おばさんはさらに続ける。

「.....ああ、そういえば昔聞いたわ。年寄りも子供も、疫病で死んだ人はみんな最期に変なサーカスの話をしたって.....もうすっかり落ち着いたと思ってたけど.....」

これ以上聞いていられなかった。驚くおばさんの声も届かず、僕は走り出した。走りながらボロボロと涙が零れた。もう訳が分からなかった。

ぼやけた視界でがむしゃらに走って、気が付くと船から降ろしてもらった場所まで戻っていた。足がもつれて、崩れ落ちるように座り込んだ。ぜえぜえと肩で息をする。それでも涙が止まらない。いつか帰ろうと思っていた場所が、いつの間にか帰る場所もなくなり知らないものへと変わっていた。悲しいのか、寂しいのか、怖いのか、ただただうずくまって泣くことしかできなかった。

「駄目だった」

「間に合わなかった」

「賭け、失敗した」

「泣いている」

「号泣、だ」

「団長、言った通り」

「故に、私たち、ここにいる」

突然頭の上から平坦な声がした。驚いて顔を上げると、上空に僕を見下ろす七人の女の子たち。

「ル・フェイ姉妹.....？」

彼女たちは頭上に僕を円で囲むように並んでいた。他人に彼女たちの区別はつかず、また一度に姉妹の中から二、三人しかショーに出ない。こんな時だが、七人全員が一堂に会する様に、一種の感動を覚えた。僕は頭の中で、以前教会の司祭に教えてもらった最後の審判を思い浮かべた。

「私たち、問う。お前、戻ってくるか」

顔を上げた僕の真正面に浮く女の子が、僕を見下ろしながらそう言った。

船に乗る間、家に帰りたい気持ちは確かにあった。短い期間だがサーカスの人々と共にいられて充分幸せだった。書き置きだけで黙って出てきてしまったことも気がかりだった。だから僕は団長から告げられた終わりを冷静に受け止めることができたのだ。一度家に帰り、家族としっかり話をした後にもた夢の続きを見ればいい。そう思えたから。

だというのに帰ってきたらこれだ。知らぬ間に二十年も時が経ったらしくて、村が荒廃して、たくさん人が死んだらしくて、ママは狂ったまま老いて。

僕も、もしかしたら狂ったのかもしれない。ふとそんな考えが頭をよぎった。夢のようなサーカスもそんな彼らと過ごした日々も、狂った僕が見た妄想なのかもしれない。あ

あ、それならそれでいい。ヘレンがチャンスくれた。団長が許してくれた。そして今、ル・フェイ姉妹が僕に戻ってこないかと言ってくれた。受け入れてくれることが何よりもうれしかった。

だから、これが狂気による幻でも構わない。

「戻りたい。もう一度、僕をサーカス団に入れてください！」

そう叫ぶと同時に温かい光が僕の身体を覆った。眩しさに目が眩む中、瞼の奥に両親とばあちゃんの顔が浮かんで、消えた。

「.....そうか、戻ってきてしまったか」

気が付いたら僕は村はずれの空き地ではなく、船の一室にいた。ル・フェイ姉妹はどこにもいない。部屋の内装に見覚えはない。ただ目の前に団長がいるから、ここは団長の部屋なのだな、とぼんやりと思った。

「坊。泣くな。嘆くな。変わったのではない。滅ぶのでもない。生まれ変わるのだ。お前の故郷も、お前も」

団長は黒い手で僕の頬を包み、涙を拭ってくれた。団長の静かで深い声。全身に染み渡るような安堵に心も体もほぐれていく。そうして僕は夢見心地のまま、団長の言葉を繰り返した。

「.....生まれ、変わる？」

「そうだ。滅亡は再生へ、消滅は誕生へ。そうして世界は回り続ける。全ては環のように繋がっているのだ。坊、お前に居場所をやろう。責務をやろう。新たな名を授けよう。そうしてお前は、真にこの一座の存在として生まれ変わるのだ」

団長の声は子守歌のよう。言葉の意味はよく分からないけど、ただただ温かかった。瞼はほとんど閉じかけて、それでも神秘的な白いたてがみと黒い手、宇宙を閉じ込めたような瞳が綺麗だなと思いながら、団長の声に耳を傾ける。

「それで.....僕はもう、寂しくない？」

「.....ああ。もう寂しい思いはすまい」

最後に団長が笑った気がした。その顔を、いつまでも覚えておきたいと願いながら、僕の意識は溶けていった。

○○○

「引継ぎは済んだのかい、団長」

「.....ああ。だから私はもう団長ではない」

「それは失敬。では訂正しましょう。お疲れ様です、カルキ」

誰にも言わずにひっそりと消えようと思ったのに。そんなかつての団長——カルキの行動などお見通しとでも言うように、目の前には四人の男たちが立っていた。

「アア、そう気を落としなさるな。ル・フェイ姉妹は仕事を終えたばかり。ヘレンは彼に

付きっきり。ナニセ彼女にとっては初めての代替わり。それも彼はあの子が引き込んだというじゃあないですか。いやはや、少女の成長は早いものですか？」

「逆だ。見送りなどいらぬと言うのに」

釣れないねえ、とミスター・マンチョーゼンが残念そうに言う。甲板の上は風が強い。黒いローブを鳥のようにはためかせながら、カルキは空を見上げた。星は薄く月は白く、地平線の向こうは徐々に色が変わり始めていた。

「それにしても、あの転婆さんがこうも立派に団長を務めあげ、そしてまた再び旅立ちの日を迎えるとは……なんて感慨深い！　これが親心というものか！」

「やめろ」

「今回ばかりは貴殿に同意する。あの少年を坊、と呼びながら、クク、余にしてみれば彼もお前も変わらぬと言うのに。小さな子供が船に飛び乗って、サーカス団に入れろと。彼はまさしくお前の再演だったぞ、カルキよ」

「……本当に、やめてくれ」

「まあまあ、よいではありませんか。せつかく旅立ち前なのですから。名残惜しいのであれば、私もご一緒しましょうか？」

全く効いていない四人に、カルキはため息をついた。こういう風に団員たちと軽口を叩き合うのは久しぶりだった。少し前までは当たり前のように話をしていたはずなのに。そう考えて、その少し前が全く少しではなかったことに、たった今気が付いた。こんな状態で彼を現世へ帰そうなんて、思い上がりも甚だしい。カルキはもうずっと、環の部外者、輪廻を見届ける機構であることに慣れきってしまったのだ。だとすれば、まさしく自分は潮時であったのだろう。

「二つ言わせろ。私は旅立つのではなく、彼が出てしまった分、元の環の中に還るだけだ。あとお前たちがこの船から降りるのは自由だが、降りたところで私と同じところへは行けまい」

「存じております。元よりはぐれものの私たちと、人の環の中から飛び出してきたあなた。私たちは消えてしまえばそれまで。誠に残念ながら、心中もろくにできぬ間柄にて……よよよ」

「茶化すな」

「ふむ、ホーイチ殿に涙を流すときはこうするものだとお教えいただいたのですが」

「ハッハッハ！　皆の衆、カルキは別れ際に真面目な話をご所望のようだ！　俺は法螺話が専門だから、謹んで貴殿らに役割を譲ろうではないか！」

「もういい。結構だ。もう、夜が明ける」

す、とカルキが指をさす。草原と丘のその先から、溢れるように太陽の光が漏れ出している。

「お別れ、だな」

誰かが、誰ともなく言った。一步、二歩とカルキは光に歩みを進める。その手に杖はもうない。

「サーカスを。滅亡を前に、せめて楽しい夢を、と。そんな私の我儘に付き合ってくれたこと、感謝している」

「何、構いませんぞ。先代に似て、いや先代とまた違う慈悲の道を、あなたは歩んだまで

のこと。ナア、皆々様」

ホーイチの言葉に三人は頷く。黒く細長いカルキの背中は、朝日に焼き付いた影のようだった。でもその影から今、最後の重荷が下りた。

「さらばだ、カルキとなってしまった子よ。次はもう少し、おしとやかに生まれてくるといい」

「.....ふふ。じゃあね、おじさんたち」

太陽が昇る。新たな朝が始まった。燃えるように、溶けゆくように、甲板からカルキの姿はなくなった。逆光がほんの一瞬、かの人を長身の身体でも白いたてがみの馬でもなく、幼い子供の微笑みに照らして消えた。

〇〇〇

ゆらゆら、ふわふわ。視界が揺蕩う。目を覚ました僕が見たのはそんな光景だった。回る、回る。揺れる、揺れる。段々と頭がはっきりする。そうして回るのも、揺れるのも、そもそも揺蕩っているのは僕の方なのだと気付いた。

「よかった、目が覚めたのね！」

誰かが僕に抱き着いた。誰か、じゃない。その声を、その髪を、その肌の色を僕は知っている。ヘレンだ。よかった、また会えた。ぼくも嬉しくなって彼女の背中に手を回した。のっぺりとした顔が喜びと興奮でくしゃくしゃになっている。そんな彼女に、喜びと、愛しさと、どうしようもない安堵を感じた。

「ああ、やっぱりあなたがそうだった！ ようこそ、ようこそ！ 先代は綺麗なお馬さんだったけど、あなたはお魚さんのね。人魚みたいでとっても素敵よ！ 私、ようやくあなたの名前を聞けるわ！ 私たちの新たな団長、あなたの名前は？」

僕の名前。言われて、そういえば僕はまだ一度も彼女に名乗っていないことを思い出した。

そうだ。僕はあの人から名前を貰った。立場を、責務を譲り受け、僕は生まれ変わったのだ。

「僕の名前は、」

瞼の奥で、誰かが僕を呼んでいる。顔も声もはっきりとは分からない。手を動かす。足——ひれを動かす。身体中に力が湧くのを感じている。

だからもう、大丈夫。

「.....マツヤ。僕は、マツヤだ。よろしく、ヘレン」

〇〇〇

村はずれの空き地に突如として光が発生した。雷や竜巻ではなく光、らしい。訝しんだ住民が見に行ったところ、そこには爛漫の花畑があった。ここ二十年不作続きのこの土地に色とりどりの花畑とは。でもその花畑があまりに綺麗なので、村の人々は喜んだ。腹の満たしにならなくても、ただ美しいだけで涙が零れそうになった。ある男はわざわざ

ざこの咲き誇る花の中で命尽きたらしい。ともかく、この村はそれだけ疲弊していた。

しかし次の年はライ麦が稀代の豊作となった。その次の年はリンゴが過去最高の出来で、その次は流石に何もなかったら、近くで珍しい金属が採れることが判明し大規模な開発が行われた。二十年の不況は、たった三年の豊作を契機にみるみると挽回していった。

村人は言った。これはきっと神のご褒美なのだと。あの光と花畑は、試練を乗り越えた我々に対する祝福なのだと。後にこの花畑は「再生の園」と名付けられ、村人によって丁重に保護された。あまりの美しさと奇蹟のエピソードに、観光資源としても密かに有名になった。

かつてその場所に異形のサーカス団がテントを張っていたことは、もう幾人も知る者はいないのである。

あとがき

ページオーバーすみません。締め切りオーバーすみません。でもおかげで満足のいくものが書けました。もっとも、これも編集様にダメって言われたらあえなくお蔵入りですが。

さて、(ページオーバーしたものの) ちょうど半分スペースが残ったのでためしにあとがきでも書いてみようかと。今回私が提案したいのは『書きたいもの書けない問題』です。私、ずっと自分は書きたいものしか書けない、自分の中に物語に対するパッションが無いと筆が進まない、というタイプだったのです。しかし今回(ネタ出し) 苦しみの中で思ったのです。

「シリアスで鬱いの、書きたい」

「私のぼんやりとした気持ち、言語化したい」

「で……できない！」

とまあ、ままならないことですね、というお話です。創作にもテーマから入る人、シーンから考える人、自己投影型、人形遊び型、プロットタイプ、一本書きタイプと様々ですが、私から言えることは一つ。

「いつだって ないものねだり しんどいな」

そろそろタイプミスがヤバいので、これにて。

追伸

てかわし、案山子皆勤賞なのじゃが？ じゃが！

舞台（リフリーズ）

舞台（リフリーズ）

これという前触れもなく語り出されるとりとめのない話は、ここ数日どういうわけか睡眠という睡眠をすべて排除して過ごす少年の、夢と現実とのおぼろげな境界をふらふら渡り歩くような意識には、とうてい理解し得ない。それが分かっている、講義開始五分前の騒然とした講堂で、隣に座る少年にさして重大でも愉快でもない日常生活のあれこれを語って聞かせる少女には、端から少年の気を引こうとか、知り合って間もない男女特有の不自然な沈黙を紛らそうとかいう考えは一切ない。ただそこにあるのは、少女の語りの合間合間に、うん。そうだね。なるほど。確かに。等々の、肯定というよりも迎合と呼ぶべき文字列をさながら句読点を打つように挿入する少年を、都合のいい話し相手として最大限利用しようという魂胆のみであった。

眠らないきみに訊くのもなんだけど、と以前少年がどこかで見せた話題を挙げることで、少女の語りは始まる。最近わたし、眠れないのよね。はじめは単に寝つきが悪いついてだけだった。部屋の明かりを全部消して布団の中に入るのだけど、目が冴えてなかなか寝に入れない。無理に目を閉じていても、頭の中でいろんなことを考え始めて、増々意識がはっきりしてくる仕方がないから本でも読もう、とびきり難しく長い海外文学でも読んでいけば、そのうち睡魔がわたしのところに降りてくるから、とか思って読みはじめた小説が、思いのほか面白い。結局それを一晩中読み続けて、気づいた時には朝になっていた。ちょうどその日は午後から講義だったから、昼まで限りなく本眠に近い仮眠をとって急場をしのいだのだけど、すると今度は夜に眠れなくなる。無理に眠ろうとしてもむしろ頭の中にぐるぐると同じ図形が回転していく図像が浮かんでくるでフラクタルの構造に無限に近づいていくのを見ているような、そんな感じがしてくる。仕方がないから、昨夜読んだ難解で壮大な海外文学のつづきでも読んでいけばそのうち眠くなるかしら、とか思って読み始めた小説が、例によって面白い……

こんなことをしているから眠れないのよ。それはわかっている。だけど、この悪循環を改善しようという思いがどういうわけか湧いてこない。もしかしたら、眠れないのでなくて、眠らないのかもしれない、なんて、思ったりする。昼よりも夜のほうが、時間がゆっくりと流れるから、そのせいもあるのかも知れない。日が昇っている間はよく眠れるの。ぐっすりだね。ねえ、いったいどうすれば眠れるのかしら。眠らないきみに訊くのもなんだけど、と少女の延々続く語りに、ようやくと他者への問い掛けが持ち出されたとき、いつのまにか壇上に上がりマイクの具合を確かめていた客員教授が、これという前触れもなく前回の講義の要点を話し出す。と、一斉に講堂が静まり返る。少女の

ほうも、ほころんでいた口元をキッと引き締め教授の話に集中する。語りの合間合間に絶えず迎合を意味する文字列を挿入していた少年に向けて放たれた問い掛けは、しかし誰にも答えられることなく、講堂の張りつめた空気の中をふわふわと漂ってゆく。

さして重大でも愉快でもない私生活のあれこれをさも意味ありげに語るわたしの語り口を、これほど熱心に聞いてくれるのはきみくらいのものよ。もっとも、きみが内心でどう思っているのかなんてまるでわからないし、もしかするときみは、わたしのとりとめのない話題に肯定というより迎合と呼ぶべき言葉でもって合いの手を打っているだけなのかもしれない。うん。そうだね。なるほど。確かに。等々の思考を一切必要としない文字列しか話さないのは、きみがこ

こ数日睡眠と呼べるものをとっていないのと何か関わりがあるのでなくて？ と少女がふたたび持ち出した問い掛けに、さあ。どうだろう。少年は答える。いや、答えを放棄する、とでも言うべきか。

講義を終えて少し騒がしくなった講堂の弛緩した空気の中に先ほど少年が返答し損ねた問い掛けはもう残っていない。そのかわりと言っては何だけど、という風に新たに打ち出されたそれは、否定とも肯定ともつかない文字列によって早々に撃ち落とされてしまった。

国語教師が結婚して姓を変えたのは、わたしが高校一年のころだった。彼女はとてもきれいとは言えなかったけれど、明るくてユーモアのある語り口は男女問わず人気があって、現代文の授業の合間合間にこれという前触れもなく語り出されるととりとめのない話題だけを楽しみにしてその授業を受けている生徒も少なくなかった。かくいうわたしもそのうちの一人だったのよ。けれど、いまになって、彼女が授業中にどんな話をしていたのか、ほとんど記憶にない。ひとつ覚えていることと言えばどういう経緯でか紹介することになった谷崎純一郎の小説「痴人の愛」の英題が「Naomi」ということぐらいかしら。

Naomiというのは言うまでもなく「痴人の愛」のヒロインナオミのことだけれど、どうしてこんなしょーもないことを覚えているのかといえば、わたしの名前が奈緒美というからに違いない。いや、理由はもうひとつあるか。

物語のあらすじと谷崎の変態チックな作家性と、そしてそのとき新たに生まれたナオミズム——これには苦笑した——とかいう言葉を、普段では想像もできないほど真剣に紹介すると彼女はまだ授業終了の五分前だというのにこれといった挨拶もなしにそそくさと退室してしまう。これがあったその翌日、彼女は、自分が婚約したことを発表する。言うまでもないことだけど、彼女はとても幸せそうだった。

婚約の発表とその前日にあった彼女らしからぬ言動とのあいだに何の因果関係があったのか、あるいはなかったのかは今や知る由もない。生徒たちのあいだでは、あのときの少しばかり奇妙な振る舞いは直前彼氏にプロポーズされたことへの動揺によるものだ、とかほかにもいろいろな憶測が飛び交ったのだけど、結婚式を挙げ、籍を入れ、姓が小林から河合に変わるころには、もはやそれは些事に成り下がっていた。

「河合先生」という呼び方に慣れ始めたころ——結婚してから大体一月月くらいが経って

いたのかしら——、彼女はさして重大でも愉快でもない日常生活のあれこれを語るかの
ように、自分が子どもを授かったことを生徒らに伝える。驚くべきは、妊娠をさも当然
のこつのように語るとりよめない語り口ではなく、発覚の時期から考えて、その子ど
もを授かったのが婚約の決まる以前だったということ——こんなことを考えるのは、わ
たしだけだろうか。彼女を取り囲み、結婚の発表のとき以上の祝いの言葉を投げかける
教師生徒たちは、果たしてその事実気付いていたか、いなかったか。

日増しに膨張してゆく彼女の腹部をみて、得も言えぬ感動と同時に、見てはいけない
ものを見てしまったような妙なグロテスクさを覚えたのは、わたしだけではなかったほ
ず。しかし誰ひとりとしてその胸奥を吐露するものはいなかった。奇妙なものを奇妙だ
とはっきり言えたらいいのに、わたしたちは心のどこかでそれを禁止し、正しさを他者
に——もしくは他者としての自分に——求めてしまう。

いつのころだったか、授業の合間合間に大した意味もなく挿入されるとりよめない
語り口が、新聞の切り抜きのあつのように不自然なかたちの穴を残して消え去ってし
まっていることにわたしは気付く。彼女は以前の姿からは想像もできないほど真剣に、
ともすれば退屈に授業をし終えると、これといった挨拶もなしにそそくさと教室を出て
行ってしまう。と、同時に授業の終わりを告げるチャイムが鳴る。

授業を終えて少し騒がしくなつた教室の弛緩した空気の中で、わたしはその不自然な
かたちの穴を漫然と眺めていた——いや、こんなピンボケした比喩では、わたしが言わ
んとするところの一割も伝えられないだろう。もっとも、この絶え間なく続く話の筋道
をきみが正しく追つて来れていたので、ということだけだ。そのとき、わたしの隣に
座つていた少年がこれという前触れもなく「女つてのは結婚すると女でなくなり妻にな
る。妻つてのは子どもを産むと今度は妻でなくなり母になる。一方で男というのは気楽
なもので、死ぬまでずっと男のままぶらぶらしてられる。例えば、不意に泣き出した
赤児をあやすとき、母親は逡巡することなく、あばばば、とかいうだろう。それを父
親は黙つて見ている。放つておけば泣き止むだろ、とか言つたりする。この違いがある。
あばばばばば、ばあ！ あばばばばば、ばあ！ そこがひどく混雑した通りだろ
うと電車の中だろうと、きっと母親は羞じることなくそう言うだろうよ。母親でないも
のには、それが奇妙に、ときにグロテスクに見えるものだ。

とりよめもなく語られるどうでもいい話の筋道は、睡眠不足で朦朧とした意識にはど
うてい理解できない。ましてや、日増しに腹部を膨張させてゆく彼女がいつのまにか授
業の合間合間に日常生活のあれこれを語らなくなつてしまつたのはなぜかなど、母にあ
らざるぼくたちにどうして理解できるだろう。と、語る。そのあいだ、わたしは、今き
みがするよつな否定とも肯定ともつかない文字列を、繰り返しささやいていた。

出産の直前まで教壇に立つていた先生は、やがてわたしたちが二年に進級するのと同時
に、産休を取る。そして言うまでもないことだけど、無事出産し、育休に入る。彼女
は一年後、わたしたちが三年に進級するときに、帰つてくる。

その初回の授業でこれという前触れもなく、女というのは結婚すると妻になる。妻と
いうのは子供を産むと母になる。わたしは妻になつてすぐに母親になつたわけだけれど、
それは率直に言つて、すごく恐ろしいことだつた。なにが恐ろしいかと言へば、とても
強い力がわたしの意思とは関係なく作用して、周りの物事を——もしくはわたしの性癖

——これは性癖という言葉の正しい意味での正しい使い方として——を——これという前触れもなく変えていってしまうこと。気付いた時には、出産に必要なあらゆる日常生活のあれこれが身の回りから排除されていた。教職もまた、そのうちの一つだった。むかしは授業の合間合間に隙あらば挿入していた無駄話も、子どもができてからはどういうわけか話せなくなっていたし、自分ではユーモアのあるほうだと思っていた語り口も、いつのまにか真剣な、ともすれば退屈なものになっていた。何もかもが、わたしの意思には委細構わず変化して、新聞の切り抜きあとのように不自然なかたちの穴が、そこに残されているだけだった——いや、こんなピンボケした比喻では、わたしの言いたいことの一割もきみたちに伝えることはできないだろう。別にわたしは、妊娠がどうの、出産がどうのとか言いたいわけじゃあない。

思うに、飽和したリュックサックを背負っている。荷物がパンパンに詰まったリュックサックをもって、あてもなく彷徨っている。その道すがら、あるものを見つける。と、そのものを欲望する。けれど、飽和したリュックサックには入らない。だから、いくつかの荷物を捨てなくてはならない。そうしないと、前に進めなくなってしまう……、と語り出し、あるいは語り終えたのかもしれない先生の語り口は、やはり以前とは違っていた。聞きながら、わたしはぼっかりとあいた不自然なかたちの穴を先生のなかに探そうとする。けれど、それはどこにも見当たらず、やがて、その穴が全く別の何かによって埋め合わせられていることに気付く。

わたしは彼女の明るくてユーモアのある語り口に、憧憬と言おうか尊敬と言おうか、とにかくそんな感じを持っていた。だから、そのなくなったのには一時落胆したりもした。あれよ。好きだった漫画がアニメ化されてよるこんでいたら、それがひどくつまらなくなっていたときの感じ。それに近いのがあった。大金が絡んでくると往々にしてつまらなくなるものよ。だからといって、彼女への憧憬とか尊敬とかが消えるわけでもないし一度夢見た教師という職業を改めようとも思わない。

少女が語り終えると、辺りはたちまちしんと静まり返る。まるで続く言葉を聴衆が待ち惜んでいるかのように思えるが、講義を終えて十分以上たった講堂には、彼ら二人しかない。さあ、閉め出されないうちに帰りましょうかという少女の合図とともに立ち上がった二人は、舞台下手の暗がりへと消えてゆく舞台役者のようにそそくさと退室してしまう。分厚くてかたいドアが轟音をたてて閉じられる。それはひとつの区切りを暗示するように聞こえる。

きみに会ったのは、ちょうど一週間前のこの講義を受けたときだった。運命的といえ、そうかもしれない。その日、講義が始まる直前に講堂に入ったわたしは、ざわざわと騒がしい空気のなかを、座る席を探して行ったり来たりしていた。二百人以上を収容する講堂はほぼ満員で、開いている席を探すのにはずいぶん苦勞したけれど、やがて教壇に一番近い長机の端っこが空いているのをわたしは見つける。そこがきみのとなりだった。ここ、空いてますか、ときみの眠そうな横顔に声をかけると、きみはちらとこちらを見たあと数回小さくうなずいて、行き詰った小説のつづきでも考えるかのように目を閉じてしまう。わたしは椅子と机との間にゆっくりと体を滑り込ませると背もたれに深

くもたれかかためいきをつく。そのとき、いつのまにか壇上でマイクの具合を確かめていた客員教授がこれという前触れもなく前回の講義の要点を話し出す。と、講堂がしんと静まり返る。きみはといえば、教授の厳然とした語りには委細構わず、目を固く閉じたままている。

講義のあときみに話しかけたのは、べつにきみが特別魅力的だったからとか、行動が少し不自然だったからではない。そのときわたしは、あと数頁で読み終わるという舞台演出について簡単に書かれた本を、そこでもう読み終えてしまおうと必死に紙面に目を走らせていたのだけど、ふと顔をあげて周囲を見回すと、もはや講堂にはわたしたち二人しかいないことに気付く。きみはといえば、腕を組んで、目を閉じて、なにかを考えるようにしている。それはさながら眠っているように見えなくもなかったけれど、こんな奇妙な状況はなかなかあるまいと興味本位で訊いてみる。なにをそんなに考えているの。突然持ち出された問い掛けに、きみはすぐには答えなかった。一分ほど過ぎて、わたしが本当に眠っているのかと考えはじめたころ、ようやくきみは、眠い。ここ数日どういうわけか睡眠という睡眠をすべて排除して過ごしている。だから、眠いんだ、とわけの分からないことをのたまった。眠いなら眠ればいいじゃない。眠りたいのに眠れない人というのはよく聞くけど、眠いのになら眠れない人というのは聞いたことがない、と返すと、きみはこういった。なるほど確かに言われてみればその通りだ。するとぼくは眠れないのでなく眠らないのかもしれない。

——思えばあのときからきみの不眠は続いていた。この一週間もきみが不眠を貫いていたのなら、今ごろまず間違いなく死んでいるだろうから、きっとどこか知らぬうちに寝ていたのだろう。とはいえ、目の下に暗雲のようにたちこめたその浅黒いくまを見れば、やはりたいした睡眠をとっていないのは明らかだ。そしてその、うん。そうだね。なるほど。確かに。等々の、あまりに無意味な文字列しか、きみが話せないようになってしまったのも、睡眠不足と関係しているに違いない。一週間前のきみは、少なくともそんな風ではなかったのだから。

舞台演出の面白さを簡単に紹介する本をやっとのこと読み終えたわたしは、相変わらずなにか難しいことでも考えているかのように固く目を閉ざしているきみの耳元で、さあ、閉め出されないうちに帰りましょうか、とささやく。するときみは、その合図を待っていたかのようにおもむろに目を開くと、わたしと一緒に立ち上がり、舞台下手の暗がりへと消えてゆく舞台役者のようにそそくさと歩いて行ってしまふ。

講堂を出、大学の敷地内をゆっくりと歩きながら、わたしはさして重大でも愉快でもない日常生活のあれこれをきみに話して聞かせたと思う。そのとききみも少なからず自分の話をしていた。実家にいるペットの寿命が迫っていること——あと一週間しかないときみは言っていたか——とか、体育のとき朝早くから走らされるのが嫌だとか、どっかの誰かがこれという前触れもなく死んだ話だとかを、きみは話していたと思う。どれもこれもネガティブな話で、興がそがれることこの上なかったのだけど、まあ、退屈ではなかった。

それらをひととおり語り終えたきみに、わたしは、本屋に寄りたいんだけど、どうする？ きみも来る？ と訊いてみる。きみはすこしためらったあと、肯定というより迎合するかのよう、自分も本屋に行くといった。……本屋でわたしは、とある映画評

論家が出したオペラについてのいくつかの記述をまとめた本を買おうと思っていた。だけど、それはなかった。その前の日に新刊の棚に並んでいるのを見つけ、しかし八千円超もする大物でその場では払えなかったから、明日買おうと思ってそのときは帰ってしまった。そしたら、一日のうちに誰かに買われてしまっていた。在庫はないかと店員に訊いたのだけど、そもそも売れる見込みの薄いものは一冊しか発注しないのだと聞かされ、取り寄せれば二、三日のうちに届くが、そこまでしようとも思えない。ある意味八千円を得たとも言えるが、むざむざ諦めたわたしは本屋のなかできみを探す。きみはすぐに見つかる。隅のほうで本を立ち読みしていたきみに歩み寄って、自分の用が済んだことを伝えると、きみは本を閉じ、棚にしまった。その本の背表紙をちらと見ると、それはとびきり長い海外小説の第一巻だった。なにを思ってか、わたしがそれを全巻買いしめたのは、きみも覚えているところだろう。きっと財布に詰め込んできた千円札の束を、何らかの手段でもって消費したかったのだと思う。そうでもしないと収まりがつかないほどわたしは無念だったのだ、と講堂を出、大学の敷地内をゆっくりと歩きながら長々と語った少女は、気まぐれに立ち止まると、これという前触れもなく別れの言葉を投げかける。じゃあ、今日は本屋にも寄らないしきみのネガティブな話も聞いたりしない。もっとも今のきみは、うん。そうだね。なるほど。確かに。等々の無意味な文字列しか話せないのだろうけど。それじゃ、ばいばい。

少年は帰宅するとすぐに冷蔵庫から冷え切ったビールを一本取り出し、それを一息に飲み干す。そのあと電気ポットで湯を沸かし、アメリカンコーヒーを一リットルほど作る。コーヒーが冷めないように断熱容器に入れ、飲みたくなったらいつでも飲めるようにするのが、彼のこだわりだった。冷えたビールを飲むのは別にこだわりではない。ただそうすることによって気分が少しだけよくなる、それだけだった。

一通り準備を済ませると少年は机に向かい、世界的に有名な映画評論家のオペラにまつわるいくつかの記述をまとめた本をひらく。それはとても分厚く、一つの頁にこれ以上は詰め込めまいと思わせるほどぎっしりと文字が詰め込まれている。少年は必死にその紙面に目を走らせる。が、絶え間なく書き綴られる記述の道筋など、睡眠不足で夢とうつつを行ったり来たりするような意識にはどうも理解できない。それでも彼は休むことなく乾いた眼球を上から下へ動かし続けていた。

どれくらい経ったろう。ふと彼は視線をもたげ、かたわらの置時計を見る。針は午後九時を示しており、すなわち彼は三時間以上にわたって無限に続くかに思える文字列の行方を追っていたことになる。が、そのわりに自分が何も覚えていないことにも、やはり気付く。もしもすぐ本を閉じてしまったら、彼はたちまちどこまで読み進めたかわからなくなるだろう。いっそのことそうしてしまって、ここ数日まったく使われていないベッドに飛び込んでみれば、すべての元凶を排除できるだろうか、という考えが一瞬脳裏をよぎる。が、彼は熱いコーヒーを飲む。

さして難解でもないのに何度読み返しても理解できない文章は、彼をひどく苛立たせる。その苛立ちはじわじわと体を焼き、頁を繰る彼に髪を聳らせる。

これという前触れもなく鳴り出した携帯電話の呼び出し音は、いったい少年になにを

知らせようとしているのか。小動物の断末魔を思わせるその甲高い音は、彼のくぐもった意識を現実のほうへ引き寄せながら、部屋中に響き渡っている。時計は午前一時を示していた。こんな時間にいったい誰が電話なんてかけてくるだろうと訝りながら少年は電話に出る。

やあ、眠らないきみのことだから、こんな時間に電話してもきっと出てくれると思っていた。相変わらずその不眠は健在のようね。まあきみ自身は健在ではないのかもしれないけど。わたしのほうも、乱れてしまった生活習慣を一向に直そうとせずただらと夜更かしを続けていたところ。とはいえまだ午前一時、夜更かしと呼ぶには早すぎるかもしれない。今日電話したのはほかでもない、一週間前から読み始めた難解で壮大な海外小説をすべて読み終え、持て余した暇をこうやってつぶそうというわけよ。そこで提案なんだけど、いまから散歩に出かけない？ 飽くまでこれは提案であって、当然きみには断る余地が残されているのだけど、肯定というより迎合を得意とするきみがこれを断るはずがない。……じゃあ決まりね。

少女は端的に集合場所を知らせたあと、一方的に通話を切ってしまう。あとに残されたのは静寂だけだった。

二人は海を左にして、街灯のない道を北へ歩いてゆく。夜の海は墨汁のように暗く、粘り気を持っている。それが少年には怖かった。ときおり、車がすさまじい勢いで通り過ぎてゆく。そのたびに道路わきの茂みからバッタだかコオロギだかの昆虫かヘッドライトを受けて飛び上がる。

わたしはいま、四つ這いになったきみの背中にまたがっている。そして口元に向けた手綱でもって、きみを自在に操ることができる。わたしが左の手綱を引けば、きみは左に進む。右の手綱を引けば、きみは右に進む。肯定というより迎合という言葉が似合うきみは、わたしに支配されることで安息を得ている少なくとも、いまのきみはそうだ。長く続いた不眠のせいとか何も語れなくなってしまった。うん。そうだね。なるほど。確かに。等々の文字列には何ら意味はない。

きみは眠らないのでなく眠れないのだと思う。初めて会ったとき、きみは確かに眠ろうとしていたはずだ。きみは眠らなくてはならない。それは当たり前のように見えて、とても大切なことだ。そしてきみは語らなくてはならない。そうしない限りきみは支配され続ける。いつまでも四つ這いになって背中にわたしを乗せたままじゃ不便だろう。きみがマゾヒストというのなら別だけど。

一週間前のあのとき、きみは、実家にいる飼い犬の寿命が残り一週間しかないと言っていた。つまり、きみの飼い犬はもう死んでいる、もしくは今まさに死にかけているはずだ。きみは心配にならないのかい？ 一週間前のきみはひどくつらそうにしていたのに、人は気付かないうちに変わってしまう。高校時代の国語教師がそうだったように。でもきみには、新聞の切り抜きのような、あの不自然なかたちの穴は見つからない。

少女は早口にそう言った。しかし少年はそれをうまく理解することができない。まるで見たことも聞いたこともない言語で語りかけられているように思える。二人は黙って、光のない道を北へ歩いてゆく。やがて少年は意識を失う。それでもなお歩き続ける。翌

朝、彼は自分の部屋のベッドで目覚めた。

そう。あれ以来きみは眠れるようになった。それはよかった。だけど、同じ日に実家で飼った犬が死んでしまった。きみの犬は実家中に吐瀉物をまき散らして、苦しみつづけた挙句死んだ。さらには吐瀉物で汚れた家具をまるまる取り換えなくてはならない。散々なものね。だけど、高校時代の国語教師の言葉を借りれば、飽和したリュックサックを背負っている。

少女が語り終わると、あたりはたちまちしんと静まり返る。まるで続く言葉を聴衆が待ち惜んでいるように思えるが、講義を終えて十分以上経った講堂には彼ら二人しかいない。さあ、閉め出されないうちに帰りましょうか、という少女の合図とともに、二人の役者は立ち上がり、舞台下手の暗がりへとそそくさと消えてゆく。と、分厚くてかたいドアが轟音とともに閉ざされる。その音を合図に、緞帳ゆっくりと降ろされてくる。これによって舞台は終わる。

奥付

案山子 2021 冬号

<https://puboo.jp/book/132142>

著者：新潟大学文芸部 著者プロフィール

<https://puboo.jp/users/sindaibungeibu>

感想はこちらのコメントへ

<https://puboo.jp/book/132142>

電子書籍プラットフォーム：パプー（<https://puboo.jp/>）

運営会社：デザインエッグ株式会社

案山子二〇二一 冬

著 新潟大学文芸部

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
